2/3-499463

# 新女界

第四卷 第壹號

Digitized by Google    Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 謹賀新年

千代田香油

毛髪の悪臭は交際上の不覺紳士も奥さんも嬢さんも香りよき千代田香油に限るとの高評盛んなり

定價
七十錢
卅五錢
廿五錢
十七錢

スワン石鹸

純白で湯水に浮き價安くて品の良き英國製スワン石鹸は全國の藥舗小間物店化粧品にあり

英國製
スワン石鹸
日本一手販賣

東京馬喰町四丁目
山岸三之助
電話浪花三七九三
振替口座二〇五〇〇

京染
悉皆商
京都市新町三條上ル
松井宗七
并ニ白生地販賣仕候

京都染元

染見本發行

黒紋附
模様染
新小紋
色染
更紗染

取引簡易

玉德商店
京都市醒ヶ井佛光寺

# 新女界第四巻第壹號目次


▲論題 ◎マリヤとキリスト　ヴワンダイク筆

▲社説 ◎幼兒の保護　安井哲子

▲教壇 ◎眞の禮拜　海老名彈正

▲想苑 ◎貞潔と人生　安部磯雄
◎讀書餘錄　小此木まつ子
◎身に泌みた母のしつけ
△十歳でわかれた母の感化　海老名彈正
△人物を横長さした教訓　三輪田眞佐子
△剛毅な教育と鎖末な注意　櫻井ちか子

▲雑俎 ◎四十四年の婦人界　一記者
◎故小林翁の事ども　鹽星子
◎忘れられぬこの聖誕祭　安井哲子
◎花の光　倉橋惣三
◎熊ちやんの夢　野口せい子
◎星の話　新井生
◎子供の歌園　赤星生

▲家庭 ◎子女教育に對する母の務(十八)　海老名みや

▲随感 ◎新年の感
◎一言一行
◎小兒を尊敬せよ

▲子供欄 ◎ゆり子とポチ　紫嵐


謹んで新正を賀す
併て愛讀者諸姉の
清福を祈り奉候

明治四十五年一月一日

新女界同人

文學博士 村上專精先生述

# 明治の模範的眞婦人

（新年贈品に好適）

月刊雜誌『人道講話』新年特號

菊版略綴　定價拾貳錢　郵稅共

◎口　繪◎

瀧川壽子女史の家庭

壽子女史の肖像及筆跡

◎講　話◎

一、序

二、瀧川壽子女史の家庭

三、壽子女史の父瀧川鳳巖氏を思ふ

四、壽子女史の母祿子刀自を思ふ

（一）祿子刀自の性行

（二）母としての教育

五、祿子刀自に育てられし壽子女史

（一）修學の經歷　（二）女史の立志

（三）女史の宗教　（四）女史の修養

（五）女史の日記

(1)立志の辭—(2)時間に關する誡—(3)試驗不合格に遇ひし時の感懷—(4)男女同權論に對する所感—(5)父母に關する所感—( )宗教に關する心得及其の所感—(7)修養的反省の辭—(8)和歌の類

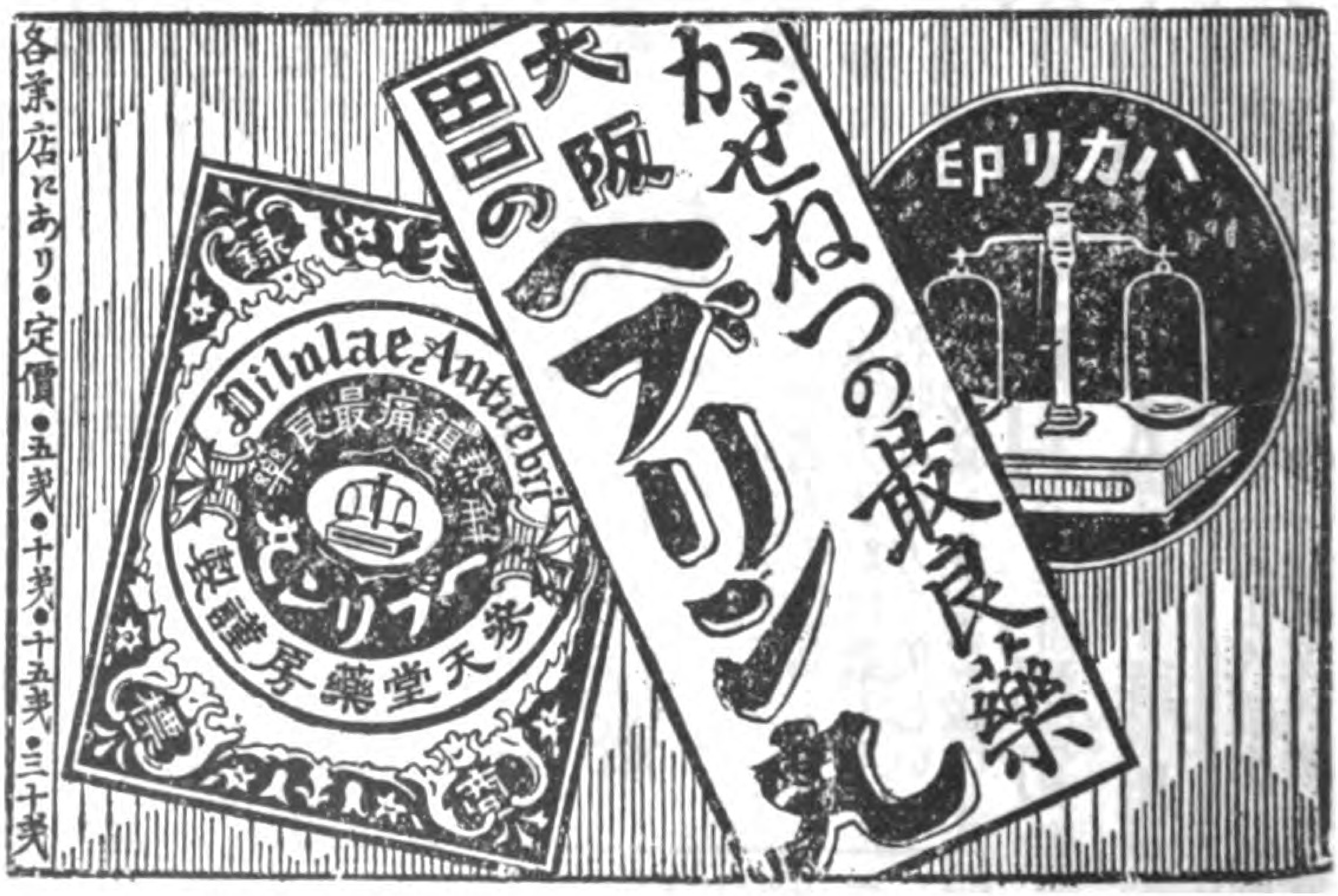
六、結

二月以降の『人道講話』宗教と道德（村上博士述）

發行所　東京市小石川區丸山町（振替東京二〇三二四番）人道講話會

「かれこれと迷ふことを勿れ
完全無缺なる大學目藥あり

大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑にして●はやり目●トラホーム●星目●のぼせ目●かすみ目●血目●疲目其他眼病一切に驚くべき奇効あり●全國各地有名の藥店にあり



新年大附錄二十四時家庭双六を添ふ

# 婦人世界

定價拾五錢　**正月號**　郵税二錢

## 現代の美人は誰か

跡見花蹊
高橋義雄
江木榮子
棚橋絢子

●九年目に親子の再會……北村美那子

●女學生と歌留多遊び……下田歌子

勅題髪の結び方……（關口ぶん　伊賀さら）

歴史講談『春日局』……風谷

をりをり草……村井弦齋

○衣服仕立直しの新工風
○急場の時の即席料理
○生花を習ふ西洋人
○古今名歌松上の鶴
○お正月の總菜

● 小說『子寶』村井弦齋

櫛笥のうち……與謝野晶子

川柳夜話 千年の春……春日野

勅題見立新料理……石井泰次郎

○名家の年賀狀……
○古今名人の逸話……
○女三人よれば姦し……
○着物は着方で美しい……
○餅の食べすぎさ歟の子

●千鳥の雪中に迎へた正月……郡司兼代子

●新婦人國記 其一 熊本出身の婦人……蘇川漁郎

## 見合ひの實驗

丸山代議士、塚原澁柿
小久保代議士、宮田修
巖谷小波、樫田學士
石黑男爵、堀越善重郎

東京京橋南紺屋町二十
實業之日本社

新女界　第四巻　第壹號

第四巻第壹號

# 幼者の保護

安井哲

「クリスマス」が過ぎて間もなく新年を迎へた子供の喜びは實に想ひやられます。世の親も亦吾身の次第に老い行く事を打忘れて、子供や孫の成長を樂しみつゝ正月を迎へ、世は何となく喜びに充ちて居る樣に見えます。「もう幾つ寐るとお正月」と唱ひ樂しむ無邪氣な喜びは、吾々成人には充分に想像する事の出來ぬ者でありまして、過去に苦勞を實驗せず、唯將來の希望に充ちて居る若い心に初めて感じ得る者であります。

希望に充ちた此の若い心程清く貴い者はありません。恰も春の植物の樣に、之れから暖い日光を受けて美くしい花となつて咲き出でんと準備して居るのであります。吾々成人は實に此植物をいたはる園丁であります。成るべく無慈悲の雨風に當てぬ樣に充分の保護を與へて、赤や白や黄色などの美くしい花

が咲くのを子供自身と共に樂しんで居るのであります。そこで此園丁が今一歩觀察を進めて、冬枯れの枝のみを殘して何の見榮もない植物が、暖い氣候に逢つて殆ど見違へるばかりの美しい裝ひをする不思議さに思ひ至ります時には、獨り外觀の美のみでなく、植物の生活に何となく深い意味でもあるかの樣に感せらるゝ者であります。若い人々も之れと同樣で、單に其擧動の可愛らしく、物言ふ樣のあどけないといふのみでなく、かゝる幼い人々が成長の後如何なる偉い人になるか測られぬと考へた時には、其無邪氣な背面に一種崇高なる或物を感せざるを得ません。此感を有つた成人と、幼者を單に弱々しい可憐の者とのみ感ずる成人とは、幼者の取扱上に大なる差違が生ずるのでありまして、此差違こそ實に幼者の精神に非常な影響を及ぼす者であります。

　私共成人は現時の境遇が兒童と著るしく違つて居りますために、充分の同情を彼等に與ふる事が出來ず、其目に觸れ易い衣服や食物などには、母親は勿論他人でさへも多くの注意を拂ひますけれども、目に見えぬ精神狀態には自然に心を留めぬ樣になるのであります。殊に世の中は次第に忙しくなり、父も母も外や内に多くの用事を有つて居りますと、子供にかけるやさしい言葉も其度數が知らぬ間に減ずる樣になり、折角話す學校や朋友の話も充分に耳を傾けてやらぬ樣になりがちであります。そこで又子供は話相手として、又指導者として母親をなつかしく又頼もしく感ずる事が次第に少くなり、自分と同じ年少者や心なき成人の無思慮な雜談に興味を生ずる樣になるのであります。

　人は成人でも友なしには居られぬ者であります。況して友達好きの兒童は、如何なる人でも周圍に話相手を求める者でありますから、同情深き母親を有つて居る子供は、此點に於て實に幸福であります。「今日はお母樣がお迎ひに來て下さるの」といふ嬉しそうな幼兒の顏は、母ならぬ保姆でさへ涙なしには見られぬ美くしさであります。「母樣」がといふ子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

供の心中には、如何ばかりの喜びと幸と又信頼とに充ちて居るのでありませうか。かゝる清く美くしい心を、若しも不注意から不誠實に傾けたと致しましたならば、母親の罪も亦實に大きな者であるといはねばなりません。

私が曾て某西洋婦人から晝食に招かれました事がありました、子供達は皆學校に行つた留守で、成人が五六名ばかり盛に御馳走を頂いて居りました處がやがて食堂の戸が靜に開いて十歳ばかりの女兒が入つて參りました。「オヤ」と一同は戸の方を見向きますとしを〳〵と、母親の椅子に近づいて何やら小聲で母親の耳に語りました。母親の顏には次第に慈愛と同情との色が充ちてまゐりました。やがて母親は總てを聞き終るや否や「それはいけませんでしたね」を二三回繰返へし「今日こそ充分に復習をしませうから、先彼所に往つてお休みなさい」と言はれました。何事かと聞いて見れば、何か諳誦が出來なかつた爲めに一時間早く學校から歸へされたのであるとの事でありました。

惱みを有つた幼い心を早く母親に打明けて慰藉と同情とを得たいと歸つて來た此娘の心中の痛ましさは此母親平生の教育が忍ばれて實にゆかしく感じました。之れが眞の信頼であります。譽められそうな事のみ母に打明けて、叱られそうな事を打匿す心狀には賴もしい所がありません。苦しみを打明け得る親でなくて、何の同情を感じませう。之れでこそ初めて子供を指導する事が出來るのであります。信仰ある者の態度も丁度此母子の關係に似て居る所がありたいとは、常に私の感ずる所であります。吾身の慰安と平和のみを希つて、他人の苦しみに冷淡な者は自利の誹を免れません。殊に種々の原因で人々に棄てられ、賴るに友なき不幸の人々には、常に同情の涙と助とを用意して居るのは、神を信じ人を愛する所以の道でありまして、我等の心に留めて居らねばならぬ事であります。

要するに苦み多き成人の世界は無邪氣なる美くし

い子供のために和らげられるのであります。古の聖賢も一度は此助けなき兒童でありました。樂しく走り興ずる眼前の子供にも亦有望の將來があります。此望み多き幼者の心身を保護して、何等の損害をも與へまいと力むる事は、非常に樂く而も決して容易ならざる仕事であります。故に吾々成人は茲に愼んで彼等の德性を傷けぬ樣、又妄りに彼等自由の發展を妨げぬ樣に、出來る丈の保護を與へたいのであります。之れには勉めて彼等の心中に入り彼等に充分の同情をなして、遊び相手として、又指導者としての責任を充分に盡したい者であります。そこで一番能く此任に當り得る者は、子供の如き無邪氣な心を以て神に親とし仕ふる成人であります。自老いても尙子供の友となり、自正しくして尙罪ある者の友たるを得るは、實に人生の美點でありますが、之れはクリスチャンの最も自然に成し得る所ろのものであります。

なんぢら眼をあげて高をみよ、たれか此等のものを創造せしやをたもへ、主は數をしらべてその萬象をひきいだし、おの〳〵の名をよびたまふ。主のいきほひ大なり、その力のつよきがゆゑに、一も缺ることなし。ヤコブよなんぞ何故にわが途はエホバにかくれたりといふや。イスラエルよ、汝なにゆゑにわが訟はわが神の前をすぎされりとかたるや。汝しらざるか聞かざるかエホバはとこしへの神、地のはての創造者にして倦たまふことなく、また疲れたまふことなくその聰明こと測りがたし疲れたるものには力をあたへ勢なきものには強きをまし加へたまふ。年少きものもつかれてうみ、壯んなるものも衰へたふるふ。然はあれどエホバを俟望むものは新なる力をえん。また鷲のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず、歩めども倦ざるべし。

（以賽亞書四十章二十六―三十一）

## 教壇

# 眞の禮拜

海老名彈正

山に登りて禮拜するものあり、海に向ひて禮拜するものあり、天を仰いて禮拜するものあり、地に俯して禮拜するものあり、宮に入りて禮拜するものあり、その仕方數々ありて枚擧するに遑ない。山に登るものは、神は山にいますと信じ、海に向ふものは神は海にありと信じ、天を仰ぐものは、神は天にありと信じ、地に俯すものは、神は地にありと信じ、宮に入るものは、神は宮にありと信ずる。是等は孰れも神の見分が幼稚である故に、禮拜の心得も從つて幼稚である。神の靈なることは多少自覺して居れども、物質に制限せらるゝものと思ふが故に、自から禮拜の地を撰擇して之を特別に神聖なりとする。天を仰ぐも地に附すも眞の禮拜を妨ぐる譯ではないが苟も神は天にありて、地に在さず、地に在して天にあらずと思惟するは、眞の禮拜を妨ぐるものとなる。故に眞の禮拜には神の偏在を認めて居らねばならない。

神の偏在は承知して居つても、古來からの習慣なるを以て、祖先の禮拜地を最も神聖なる所と心得、この聖地にて禮拜することは、特別に神の聖旨に叶ふものとなし、他所にて禮拜するを不敬と心得るに至る。民族宗教には必ずこの種の聖地があつて、こゝ

に神明が特別に宿り給ふとする。又は世界的宗教として廣く唱道せられたもので、その禮拜地を特別なる場所に限り。その敎徒をしてこゝに巡禮せしむるのである。アラビヤのメッカ府の如き、イタリヤの羅馬府の如き、高野山の如き、身延山の如き、本願寺の如き、人をしてこゝに參詣するを最も難有ことと思はしむる。かくするは人心の弱點にほださるゝものにて、眞の禮拜とは言ふべからず。神の遍在は認めて居るも、人情の弱點にほだされ、神の難有さを世界の一局部に限るものである。眞の禮拜はこの無限を超越する所なくてはならぬ。

「神は靈なれば」の一句凡て是等幼稚なる見解を打破して餘りある。靈と遍在とは分離すべからざる雄大の思想である。無限の靈は宇宙何の所にも存在し給ふ筈である。故に此國彼國に限りて特別に在ますが如く考ふるは誤謬である。氏神崇拜の如きは極めて幼稚なるもので、分けても神棚を飾りて之に向つて禮拜することは、小學校などにて奬勵すべきことにあらず。さる官立學校にては神棚を作り生徒をして之に向つて崇拜せしむるそうであるが、時代後れも亦甚しといはねばならぬ。眞の神が神棚に在さゞること、又神社にましまさぬことは明白なる道理なるが故に、現代の敎育を受けつゝあるものには、神棚崇拜や氏神崇拜は斷じて眞の禮拜とは言ふべからず、之を虛僞の禮拜なりといふものあるも、誰れか之に對し眞面目になつて辯解することが出來やう。昔は寺や宮を佛や神の在します所と心得て、參詣したのであるが、是れは幼稚なる考に基く禮拜式である。現代の智識ある人に之を强るは僞善を行はしむるに外ならぬ。昔は敬虔の行であつて、善とも美ともいふべきことであつたが、今は反つて不敬の行僞善の振舞といはねばならぬ、同じ行も內容が變れば相違は天地も啻ならぬ。さりとて寺や神社が僞善といふ譯ではない、こゝは神佛の特に存在する所にあらずして、單に神佛禮拜の場所と心得ればよい。寺や宮が人を潔むるにあらずして、敬虔の情深い人



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

が之を神聖ならしむるを得。古今の思想は全く顚倒したのである。之を心得て神社に於ける崇拜を執行するときは、強ち眞の禮拜とならぬ譯のものでもない。神棚の如きは教育ある人々の家庭より取り拂ふべきものであるが、神社は之を取り片付る必要はない。寧ろ祖先の禮拜した靈地として之を莊嚴に修復し、以て禮拜の場所とするのは決して厭ふべきことではない。

「神は靈なれば」の一句は深く之を考ふるときは、一句にて盡すべしといへども、淺く之を考へ去るときは、眞の禮拜を完うする所以とはならぬ。前段に於て多神教の思想が最早眞の禮拜を助け補ふにあらずして、却つてその妨碍となることを論じたのであるが、神の遍在を認むると同時に、多神教にも劣り果てたる誤謬に陷ることもある。多神教は神の遍在を見認て居らないのであるが、幼稚ながらも神の人格を認めて居る。故に崇拜者をして恭しく敬畏の態度を持たしむることが出來る。然れども遍在の神に到達するときは、神の有限を打破すると、同時に神の人格を無視し力なき汎神教となり果つるのである、汎神教の神は冥想すべきものにして禮拜すべきものではない、悟道すべきものにして、畏敬すべきものではない、反照すべきものにして、愛慕すべきものではない、畢竟するに拜すべき神は自から消え失せて、己れ自からが神となるのである。此の如くなれば崇拜は無意味とならざるを得ない。禪僧が恭しげに佛像の前に三拜九拜するは意味なきことにて、虛僞の行爲に外ならない。靈魂の不朽を信ぜずして祭文を讀み、死者の靈前に告げ申すといふが如き、聞くにも堪へ難いおこの舞振である。その如く神の人格を無視する思想は禮拜そのものをも無視して居る之を考へずして敢て禮拜の儀式を執り行ふならば、是れぞ正しく虛僞の禮拜といふべきである。

「眞の拜する者靈と眞理とを以て父を拜する」との一句は、「神は靈なれば」の一句を補ひ得て盡せりといふべきだ。眞の禮拜は人格ある靈能に對する莊嚴の



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

態度である。物徂徠が天を敬ふは、君を敬ひ、父を敬ひ、兄を敬ふのたぐひであるといつて居るが、まことに天を人格視してこそ始めて畏敬することも出來るのである。神を父と見るのは第一に神を人格視することである。人格とは人形をいふのではない。神に身體あり、耳目鼻口ありといふのではない。若し之れがあるかの如く思ふならば、是れ神を偶像視するのである。一體人格といふ觀念は最も深遠にして威儼あるもの天上天下之に比すべき權能はない。自識と自斷とは人格の二大要素である。神を父と仰ぐはその愛なる善意志をいふのである。神は愛なりとあるが、是れは取りも直さず、その善意志をいふのである、意志は靈能である、善意志は吾人の尊崇すべき天父である。絶對の權能は卽ち絶對の意志に存する。此善意志が宇宙を支配し、宇宙を經營し給ふのである。吾々人格を有するものが宇宙の絶對人格に對する態度は、卽ち絶對の從順、絶對の信頼、絶對の崇敬でなければならぬ。吾々が此絶對の善意志に對して禮拜するは至極當然のことである。吾々は兄を敬し、父を敬し、君を敬し、師を敬する、是れ父兄君師の人格に恭しく敬意を拂ふのであつて、吾々は之を敬禮といふ。吾々が無上絶對の天父に對する畏敬の態度は、吾々之を禮拜といふ。禮拜は有限の小我が無限の大我に對する最も慇懃なる恭敬の態度である。

神は無形の靈であるが故に、之を拜するものは心の奧深い所に於て拜すべきである。我が靈を以て神の靈に感應するやうに、靈と靈とが觸れ合ふやうにせねばならぬ。聲もなく臭もなき隱れたる心の底に於て禮拜するときは、そこに何等の形式なく、何等の修飾なく、從つて何等の虛僞なく、誠心を以て眞の神に親しみ奉るを得、之を眞の禮拜といふ。神は人格の靈である。人より仰ぎ見れば聖なる天父である。故に我々そは諸々の邪情惡念を去り、正心誠意を以て事ふまつらねば、神に接し奉るを得ない。心清からざれば神に見ゆることは出來ぬとある。吾々は天

父に對し奉り、子女の父母に對するが如き態度を取り、絶對的に從順たらざるべからず。神は自から僞ること能はざるものとある。眞實無妄は則ち神の本質である。神は眞實無妄の權能である。故に吾々は神に對し絶對に信頼すべきものである。又神は無限の恩愛を以て吾々に君臨し給ふが故に、吾々はこの神に對し奉り、愛慕の情禁ずべからず。之を要するに、我々の靈能はその道義たると美妙たると又反照たるとを問はず、盡く皆神より授けられたるものなれば、元と是れ神の内容の要素たらずんばあらず。吾々は是等凡ての靈能を研き修めて神を敬慕し、欽仰し奉らざるを得ない。之を眞の禮拜といふ。故に眞の禮拜ほど至誠なるものはない、古人曰く、至誠天地を動すと、これが即ち眞の禮拜である。眞の禮拜ほど人心を强健ならしむるものはない。吾々の普意志を注ぎ盡して神を崇拜するほど快心なることはない。其の禮拜には吾々の智情意は遺憾なく活動するのである。故に眞の禮拜は人格の飛躍であり、精神の至樂である。朝日の蔭の翼に乘じ、天雲高く翔りゆき、光明より光明に入り、榮光より榮光に登り至尊至大の權威に向ひ。面と面と相接し、洋々たる畏敬の聖氣は充ち溢るゝ。是れ即ち眞の禮拜の境涯である。

---

エホバよなんぢは我をさぐり我を知りたまへり。汝はわが坐るをも立つをもしり、又とほくよりわが念をわきまへ給ふ。汝はわが歩むをも、わが臥すをもさぐり出し、わがもろ〳〵の途をことごとく知り給へり。わが舌に一言ありとも視よエホバよ汝はことごとく知りたもふ。なんぢは前より後よりわれをかこみ、わが上にその手をおき給へり。われ何處に行きて汝をはなれんや、われ天にのぼるとも、海のはてにすむとも、汝がしこにいまし、汝の手われをみちびきたもふ。神よ願はくば我をさぐり、わが心を知り我もろ〳〵の思念をしりたまへ。我よこしまなる途にありやなしやを見て、我を永遠のみちに導きたまへ。

---



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

想苑

# 貞潔と人生

安部磯雄

戀愛なきの結婚と、戀愛のみの結婚とは、何れが優つてをるかと云ふことは從來から論ぜられてをることであるが、余は何れかと云へば戀愛なき結婚よりも、寧ろ戀愛のみの結婚をとるのである。近來は男女の問題が盛に論ぜられ、自然主義の如き議論に對しては頭から之を排斥するものもあるが、自然主義も惡いところは惡いけれど余は强ちに排斥せぬ。自然主義は戀愛なき結婚、即ち家のためとか兩親のためとか云つて自分の自由を無視し、人間本來の性情を無視した、習慣的道德に反抗した。結婚は當事者間の問題である、家や親のためでない、當事者間の利害を基として解決すべきものであると唱へて舊式道德を打破したのは、確かに自然主義の勝利であると思ふ。

併しながら、戀愛のみの結婚は決して幸福なる結婚とは云へない。自然主義が以上の如く習慣道德を打破したところは、吾人も之を是認するのであるが然し夫れでは未だ足りない處がある。此の點に於て自然主義も亦た今一段進歩せねばならぬと思ふ。私は先夜坪内博士の試演場で、文藝協會の「人形の家」の試演を見た。御承知の通り中々の上出來であつたが、彼のノラが主人公の自分に對する態度に慊

らず、家出に際して滔々と罵つた言葉には實に痛快に感じた。「私は妻たり母たる前に先づ、人たらねばならぬ、人としての自分を敎育せねばならぬ義務がある、どうしても此の家に止ることは出來ないと」之れを聞いて今日の多數の日本婦人は極端と云ふであらうが、苟も基督敎を信ずるものは、何人も首肯するであらうと思ふ。余は日本婦人が速かに此思想に到達せんことを望んでやまぬ。

戀愛のみで滿足が出來るならば此夫婦の如きは實に仲がよい、自分の命の樣に夫を愛してをる。家は裕福である。妻はチヤホヤと喜んで、夫はそれを「家の雲雀さん」と云つてをる。それが一朝覺醒するや、私は父から人形の如く育てられ。夫から人形の如く愛せられてをつた。今日かぎり此の人形の衣物をぬぎ、人形の家を出でて行くと喝破して驚きとゞむる夫を振りすてゝ出て行つた。之れ非常なる婦人の覺醒である此人形の家は遂に歐洲に婦人の覺醒を惹き起したのである。これを見ても戀愛だけでは人生の幸福を完ふするとの出來ぬことを證明して餘りある。

然るに現代の日本は私の見る所ろにして誤りなくば人形の家にチヤホヤし

て居るノラたらんことを理想とし、又彼の夫ヘルマーたるを喜んでをる者が實に多いと思ふ。即ち所謂自然主義戀愛主義を最上の理想としてをると思ふ。少くとも今日の小說はそうである。そうして小說がもし社會を寫してをるとすれば、社會に其まゝの事實があるものとせねばならぬ。私は時々小說を讀むのであるが、今日の作家の誰の作を見ても、男女の結婚は戀愛のためのみのものであるかの如く書かれてをる。自然主義の作家は當事者の幸福といふことを考ふるに、戀愛其物が即ち幸福であると云つてをる。然るに戀愛其物のみが幸福でない、吾々は其結合の結果がどうなるかと云ふことを考へねばならぬ。私は自然主義が習慣道德に反抗して立つた事を是とするが、其の戀愛萬能主義をば贊成することは出來ぬ。

今日の社會は實際非常に腐敗してをる。其頽廢の空氣は膏肓に入つてをる。先頃も廢娼同盟會の席上での打明け話しであつた。我等は感情では惡いと思ふが、相許してやる事か果して不義かと理屈を曰はれると困る。自然主義が勝利を得て居る今日習慣的にはよいが、理屈ではそう行かぬ、こゝはも少し強い根底を持てかからぬと駄目だとは、思慮ある人の話であつた。私の意見では、この貞潔と云ふことは神の命じ給ふ所であると思ふ。これが尤も力強き根據である。併しながら、これがもし一般人士につよき權威をもたぬとすれば、宗教問題以外に其の根據を見出すことは必ずしも困難でない。夫れは何ぞや、ユーゼニック即ち人種改造問題である。今日以後の國民は其の肉體に於て亦精神に於て益々改良して行かねばならぬ、とても現在の吾々日本人の樣では世界の舞臺に於て歐米人と平和の戰爭をすることは出來ない。然らば如何にして改良すべきか。夫れは善きものを遺傳し行くより外に仕方はない。不義不道德をするのは其身體の破産をするのである。如何に偉らい人物でも一代限りで破産しては何の役にも立たぬ。要は人物の蓄積にある、立派なる人格、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

健康なる身體を蓄積して五代六代に及べば必ず偉大なる人物を生ずるのは、歷史が之を證明してをる。眞の音樂家は三代かゝらねば出來ぬと云ふことがあるが、之れは音樂家のみに限つた事ではない。夫れにつけても、自分の心掛け一つで自分よりも、ヨリ善き子孫を後代に殘すと云ふことは間違いない所である。之を成就するには貞潔の德を立てねばならぬ男女問題もユーゼニックから云へば明白である。意馬心猿の狂ふがまゝに一任するのはいかぬ。公娼制度の如きは此點から云つて最大の敵である。年若き男女が合意の上に通ずることも此點から反對せねばならぬ。各國の法律では大抵男は二十五歲、女は二十歲前後を以て結婚年齡としてをるのであるが、善良なる子孫を得ると云ふ點から云へば、若年の者は駄目である。或學者の調査によれば多くの天才偉人には末子が多いとの事である。之れは親が體質智力人格ともに尤も發達した時の子であるからである。故に若年の男女の結婚は國家社會の上より云ふも亦一身の經濟上より云ふも決してよくない事である。吾人は此點に於て切に青春の男女の貞潔を望むのである。

然らば貞清純潔の德を完ふするには如何にすべきか。之は消極的に慾望其物を抑へるのは効力がない。心理學上の原則から云ふも、或る物慾を抑へんとするには、夫れ以上のものを以て、積極的に其の精力を轉換するにあるのである。眞向から抑へるのは賢いやり方でない。夫れ以上の有力なものを持てくるのである。學生にベースボールやボートレースをやらせるのは此點から云つて非常な利益がある。近來野球問題などが起つて、學生が野球に耽るのを批難する者があるが、私は斷じて然らずと思ふ。野球に熱心な生徒は通例實に其の精神も品性も立派な者である。運動嫌ひな學生に限つて品行が惡いのである。

最後に宗敎と戀愛との關係を考へて見たい宗敎はどう云ふ力を持てをるか。基督敎は理屈ではない。

余の青年時代の友に基督教を信じて氣狂になつた人があつた。之は極端な例であらうが、之で實に宗教が恐ろしい力のものであると云ふことがわかる。又宗教は戀愛と頗る相似たるものがある。男女の戀情が其儘に宗教となつて居るではないかと思ふものがある。例令ば約翰傳第十五章に見よ、之れを男女の關係とすれば如何に密接な情緒であるか、實に漆膠の如きものがある。男女の戀愛は對照物を認めて、夫れを愛する、基督教も之れと同じである。失戀の結果尼となるのは一切を捨てたのでない、その愛の對照をヨリ高き所に見出したのである。男女の關係と宗教には、もと／＼同じ所に根ざすものがある。宗教が此の男女の戀愛に代り得べき性質あるは非常に價値ある所である。宗教に狂するのはほめたものでないが、然しこう云ふ熱烈な點は、とつて以て人生社會の幸福を増進するために用ひねばならぬ。

　男女問題位大事な問題はない。私共の貞潔によつて、子孫が立派になるならば、我等は子孫のために美田を買ふよりも、財寶を貯蓄するよりも、人物の蓄積をなして、國家社會を稗益せねばならぬ。然して貞潔の美德の根底はユーゼニックよりも、倫理道德よりも宗教的信仰に根ざゝねばならぬ。（訣）

# 讀書餘録

小此木　まつ子

一

つひ二三日前に或る人から、其の著書を一冊送つて來た。見たところが、それは、我國の俳句を意譯したものであつた。いくら意譯であらふが、とても我俳句の樣なものを他國語に直すなどは、不可能の事に屬する。無理な事を企てたものと手に取つて、

先づ其の表紙其他の體裁を可成りに好いと見たあとで緒言を讀むだ。先づ驚いたのは、是れが其人の獨學の結果に成つた製作物といふ事であつた。此人が過去三年間、金と時とを、日本文學研究の爲に費して居つた事は知つて居る。然し誰とて指導者がある譯では無い。全く圖書館通ひの獨學に過ぎぬ。他國人が、而も他國に在つて、日本人に尚ほ困難な日本古文の勉強を續けるのは至難の事に相違ない。而も其職を拋ち、全力を傾注して研究した結果、此本が出來た。と斯う思つて來ると、批評も何もよそにして唯だ其の熱心と精力とがまことに貴く思はれる。

緒言にもあつた通り、此人は、兎に角に譯し得る句を求めるが爲に、無慮數萬句を讀み破つた。唯讀むといへば何事でも無く聞えるが、「くづし」書きの假名字、難解の漢字、殊には俳句に有り勝ちな漠然たる語句、是等を征服して、一句一句の意味が瞭然たるに至る迄の骨折といふものは、到底、吾々門外漢には判らない。其の何萬句を讀破して、一年分三百六十五句に意譯を附け終る迄の熱心と元氣とが、得難いものに思はれる。勿論、學者でも無い此譯者が職業を止めにしての此の勉強も資金があるから出來る事には違い無いが、しかし今の我國の若い人達に、是程の氣力が多く有らふか。資産ある人にして、自ら、此種の研究に從事し、唯其仕事のために、學問の爲に、是程の眞面目さを示す人が見られ樣か。得に走り、利に趨くの風が、あまりに強く吹き荒ぶのが、我國の昨今とも思はれる。我國に欲しいのは此種の人物である。

## 二

同じく執着力の強い例には、是れも著述家の、而も南阿に名高いシユライナー夫人がある。「婦人と勞働」と名のついた本が、此頃手に入つた。オリヴ、シユライナーの著とある。先づ題目から判じて、一寸仕事の片手間には出來相にもない本と思つた。書棚の上に載せ樣としたが「忙がしく本と、も言緒のと、雜誌の目次だけは落さず讀むもの」と數へられ

た舊師を思ふて、せめては、それだけもと讀むで見れば是れは又恐ろしい履歴に成つた本である。夫人は幼時から南阿で育たれたらしい。十六七の若い頃から、後年の大著を心掛けて婦人に關する萬般の材料を蒐められたさうな。其の順序としては性の生活を見るが爲に植物の或物から始めて、順次進化發展の度を捜ねられた。其研究の爲には阿非利加、蠻族の生活狀態を目擊して、餘程の參考にもせられた。此樣にして年々蒐集した材料、十數年の後には非常な大部をなしたといふ。然るに丁度ボーアの戰爭となり、夫人は故あつて其の戰亂の中に捕虜同樣の身となる。それのみならず永年苦心の原稿は悉く兵燹にかゝりて燒き盡された。土人の注進によつて此報を得た夫人は、直ちに意を決して筆を取り、記憶の底を探り探つて唯一走りに書き流したものが此「婦人と勞働」となつたと云ふとである。急がれたのも無理は無い、何時襲擊を受けるも知らぬ藁小屋に隱れて、敵の狙擊を恐れては點火も出來ず、纔に洩れる日光を便りに、呼吸ある中にと書いたとある。論と筆とに表はれた、いひ難い力に醉はされて我知らず何百頁を讀むで終つたのも後ろに隱れた此熱心と覺悟との盛な發動の爲であつたらふ。其身女であるが爲に、一生を婦人の爲に捧げた此人、而も其仕事に至つては、決して天下に鳴る樣な華美な事業では無い。其榮の無い世に知られぬ一事業を以て婦人社會に貢獻する自覺を以て、半生の心血を絞つた此夫人の樣な人もある。其の信ずる所に忠實な心と思ふ所を貫く偉大な精神精力を羨まずには居られない。

## 三

「仕事あるものは幸なり」といふのが、「婦人と勞働」著者の言だ。所謂職ばなれをした人ほど悠然な者はない。他人に寄食する他に道は無く、食客として世を渡るばかりになる此著書が同性の爲に悲んでやまぬ所のものは、此種の食客連があまり婦人間に増殖する事だ。女に職業の無いのは普通の狀態、一家を治めてゆく爲には、別に業を求める事は出來な

い。さう思つたのは私の間違ひであつた。此處に所謂職業は決して外に於ての働きばかりを言つたものでは無い。一家を治める事、是れ一つの大いなる働きで、此職にある女子は決して。男子に寄食するものでは無い。

凡そ世の中に是程大きな仕事はなからふ此重大な齊家の職を荷ふ人を食客と呼ぶのでは無かつた。唯だ近代物質的文明の進歩した結果、歐米の社會では此家内の仕事が日に月に婦人の手から奪ひ去られて女子は無職の有様に近い。古來日常生活に婦人の世界と認められた臺所にさへ我々の手は要らなくなつた。華美な社會では給仕人から小間使ひまでが男にかはる。裁縫の苦勞と樂しみも今は全く婦人のものでは無い。暑からふが寒からふが、手を濡らさずに綺羅をまとふ事も出來る。遂に女子の大事な育兒の事さへが、今は女性の手では追付かなくなつた。漸う物心つく頃になると、歐米の社會では早く特別教師が附く。或は紳士淑女の教育を受けるが爲と言つて、早く名高い學校に送る。母の手を盡す部分は殆ど皆無になるのである。こゝで始めて、妻たり母たる人達が、無職のあはれな有様になつて終ふ。徒に美を飾り、媚を賣つて男子に養はれむと力める事になつて來る。眞に歎く可き事だ。此弊を救ふが爲には、我々にも、男子と同様の教育が欲しい、職業に堪ふる準備がしてもらひ度い。といふのが、シユライナー夫人の熱心な主張の様に思はれた。幸か不幸か我國では此歎きを見る迄に文明の度が進むで居ない。婦人が昔ながらに受持つて來た仕事は、まだまだ決して奪ひ盡されはしない。

充分に我等の腕を振ふ可き範圍は家内の仕事に澤山にある。衣食住に育兒に、養老に、仕事は大に吾等を歡迎せむとして居る。唯だ活動を待つばかりである。此様な境遇に在つて尙且つ寄食者の歎を見るならば、罪は文明に在るのでは無く、全然吾々婦人にありと言はなければならぬ。

# 身に沁みた親の躾け（諸名家の追懐談）

## 十歳で分れた母の感化

海老名彈正

私は十歳の時に母を喪ひましたが、少い時に分れた母親の感化は、私には忘れ難い幾多の印象を與へられてゐる。一體私の母は積極的な思想を持つて居つた人で、昔の道德に從つて良く從順に夫に仕へてゐたが、時々物事に應じて現はれる豁達な氣象に、私の少さな胸はどんなに廣められ、强められたか知れない、私は隨分いろ〱な先生に習つたが、十歳の時に分れた母親ほど、强い深い感化を與へてくれた人はないと信じてゐる。幼ない記憶を辿つて亡母の面影を偲んで見やう。

▲運勢早見

母がなくなる二三月前の事である何でも寒い時であつた。夕方遊から歸つて見ると、母は臺所の竈（私の地方の名稱）に跪んで火吹竹で御飯の火を燃して居る。私も寒いので火にあたる積で母の傍により添ふと、つひ膝の下に折手本見たやうなものがある。「お母さんあれは何です」と尋ねると、「あれは人の一生が分るので、立身するかしないかゞちやんと書いてあります」といふ返事である、さア、私の心は子供ながらに心配になつて來た。自分ではえらくなる積でゐても、果してえらくなれないならつまらない。お母さん私は如何でせうと云ふと、さう、お前は土性辰歳だつたね、といろ〱繰り合せて、あゝ、お前は若い中は大分苦勞をするが、後では屹度よく

なるとあると聞かしてくれた。自分の事はそれで先づ安心だが、お母さんの事が聞いて見たくつてたまらない。それぢやお母さんは如何ですと問ふと、本も繰らずに、おれか、おれは大變いゝよ、私が男に生れたら、擊劍槍術で天下に名を擧るが、女に生れて來た許りに、かうやつて竈の前に跪んでゐるといふ返事であつた。

　母が擊劍槍術で名を揚げると云つた言葉は私に驚きと奮發と、お母樣は可愛想だといふ同情の念が起つて來た一體母方の方は代々武藝を以て有名な家で、柳川藩の足達八郎足達茂平と云へば、非常に聞えたものであつた。それ故自然母も武藝を目擊して、話が深く沁み込んでゐて、野心が胸に湧く時は、女ながらも武藝が目の前に見えたに相違ない。夫れ故男だつたら擊劍槍術で名を揚げると云ふ言葉が出たのであらふと思はれる。

　私はこの言葉を聞くと非常な感に打れた。女でさへ名を天下に轟かそうと思つてるぢやないか、おれは男だ、えらくならずに置くものかと、非常に感奮し重大な責任のあるを感じた事を今に忘れぬ。

▲芝居見物

私の藩では武士は芝居を見る事が出來なかつたの

で、芝居見物には、久留米領まで出かけたものだ。近處の人々に誘れたのであらう、或時母は私をおんぶして祖母と共にソロ〳〵と芝居見物に出かけた。私が四歲位の頃かと思ふ、もう夢のやうな記憶である。私は芝居小屋の入口の喧騷に先づ度肝を拔れた中に入つて舞臺を見たけれど一向譯が分らぬ。母にだつこをしてあたりを見廻すと、見物人が悉くシクシク泣いて居る。今人に聞けば何でも鏡山であつたらうと云ふことだ。それに釣り込まれたのか、私はもう歸る〳〵と泣き出したので母は早速私をつれて見物を半途にして歸路についた。其歸り路に野原の一本道を歩かせられた事などを覺えてゐる、それ以後と云ふものは、母も二度と芝居に行つた樣子は見えなかつた。

　芝居について、も一つ忘れられない記憶がある。それは七歲位の事と思ふ。裏の柿が甘くなつたかも知れない、見て來ようと、夕方母は私をつれて柿の木の下に立つて、一つ二つをちぎつたが、みんな澁かつた。まだだめだと葉越しに夕陽を見てゐた時、芝居の打出しの太皷がドンドンドンと聞えて來た。其時母は、あれは芝居のおしまひの太皷だ。お前にはあの太皷の音は如何聞えるかと尋ねた。私は分りませんと答へると、あれはね、バカバカバカと響くんだ。今迄全然嘘をやつてゐるのに、見物が泣いたり笑つたりして喜んでゐるから、バカバカバカと響くんだと訓へてくれた。

　それが身に泌み込んでゐたせいかも知れぬ、私は其後三十五年餘り、東京に來るまで、つひ芝居といふものは見た事がなかつた。何も芝居見物が惡いと云ふ考へを持つてゐたわけではないが、何しても見物する氣になれなかつたのである。私は今にして思ふが私の母は何等學問のあつた人でない、やうやつと假名が書ける位のものであるが、それでも私の教育の上には非常な注意を拂てくれたものと思ふ。私が芝居小屋で泣いてから、自分も一度も見物にはいかなかつた事から見ても、私は母の心が察しられる。

## ▲口をしぼる外はない

これも其頃の事である。或日の夕方私は竈の前で火を燒いて、母は後の方にて煮物をして居つた。スルト母が「武士は口をしぼる外はない」と云つた。「お母さん、それはどう云ふこと」と尋ねると、「それは食べたいものを食べないで辛抱することだ。武士は祿が定まつてをる。百石は百石、二百石は二百石とちやんと定まつてをる。夫れ故武士は自分の食べたいものを辛抱して、御客には御馳走をしてやらねばならぬ。金がはいつて來れば何でも嗜いものを買つて食べてもよいが、武士はそう云ふことは出來ない。口を絞るとはそう云ふことである」との事であつた。私は其時、武士と云ふものは實に困つたものだ。食いたい物も食はないで行かねばならぬかと初めて思つた。然し此事ありて以來、菓子などほしがつた事などは決してなかつた。そして私は食物など云ふことに一向心をとめないやうになつた。どんなものでも與へられたものに滿足する事が出來た。

## ▲お前は思ひやりがない

八歳の時であつたと思ふ。お母さんに赤坊(弟)を脊負はして貰つて門の處に出た、所が赤ん坊が泣くも〳〵非常に泣く。私は堀側の柳の木を叩いて何か調子をとつて泣かせまいとするけれど、どうしても泣きやまない。すると母が門から出て、歸つて來いと云ふ。母は「お前におんぶさせるのは、無據ない事があつたからだ。お母さんは非常に困つてをる、夫れに泣いたら泣かせないやうにしないで、却て泣かせる。お前は思ひやりがない」と云つて赤坊を取つた。私にはお母さんの云ひ分が無理のやうに聞えたが、然し一面には、ア、泣かせないで居る方法はなかつたであらうか、お母さんはよく〳〵困つて私に脊負はしなさつたのだと云ふ、ア、惡いことをしたと、心から母に同情を表し、同時に人に物を依賴された時は眞に賴まれた人と同情同感になつてせねばならぬものであると云ふことを覺つた。

## ▲書物の讀み方

私は八九歳の頃から隣家に論語を習ひに行つてをつた。論語の第一巻を了つた頃の事である。或朝その復習に行つた。我家と其家とは小さな堀と藪を隔つてをつたので、隣で書を讀む聲は家の勝手には手にとる様に聞えた。一冊を讀み終つて家に歸ると、母は「お前は復習をしたか」と云ふ。ハイと答へると「お前は初めは大きな聲で讀んで、それから段々低くなてつ、終には蚊の鳴く様な聲で讀んだであらう」と云はれた。

夫れは實際母の言の如くで、初めの方はよく覺えてをつたので、仲々盛んな聲で讀んだが、段々知らない字が出て來て、ひつかかり、まつかゝり讀んで、終りの方になると聲が出せなかつたのである。母が云ふには「書を讀む時には、初めは小さい聲で、少しづゝ段々大きくなつて、終には聲を張り上げて、大きな聲で讀むものである」との事であつた。之れは非常に私の心を動かした。初めを少さくして後を大きく讀むには、初めよりも後の方をよりよく知らねばならぬと云ふことを覺つた。此の母の教訓は私の生涯の教訓であつたと云つてもよい。初は少さく後は大きく、凡ての事が龍頭蛇尾でなく、蛇頭龍尾にやらねばならぬと云ふ決心は、此時より生じて私の生涯を一貫してをる。



## ▲武士の自覺

私が九歳の冬であつた。或る大層風の烈しい大雪の日に、私の門前を魚屋の米吉と云ふ者が魚を擔ぎながら通つて行つた。其時私は室の中に火鉢にあたつて母は傍に裁縫をしてをつた。すると母は突然私に向つて「米吉は嘸ぞ寒いだらうね」と云つた。私は何心なく「そうでしよう、寒い事でしよう」と答へますと、母は更に語を繼で「米吉は寒い目をして魚を賣つて歩いてをるのに、お前はそうやつて、火鉢にあたつてをるが、米吉とお前との違ひがわかるか」と尋ねられた。當時は平民と云ふものは下駄を履くことは出來ない、どんな時でも草鞋をはいたものである。私は餘程考へましたがどうも分らぬ。

「お母さん分りません」と申しますと、母は「夫には大に譯がある。米吉は平民だ、暑い寒いに拘らずあゝやつて魚を賣つて働いて居るから、戰があつても出て行かなくてもよい。自分で働いて妻子を養ふのであるから、戰の時は逃げてもよいのであるが、お前は武士だ、此那寒い日には何もしないで暖く火鉢に當つて働かずに食つてをるのだから、イザ戰爭と云ふ時は、主君の旗下に走せ參じて、御馬の前に討死をしなければならぬ。主君と祖先とのおかげでこうして居るのであるから、まさかの場合には討死をしなければならぬ」との事であつた。私は其時ゾッとして刀で刺されたやうな、何とも云へぬ氣持になつた事を今に記臆してをる。自分は死ぬるために生きてをるのかと思ふて、誠に膽を寒からしめた。併し其時自分は武士であつて、まさかの時に討死をせねばならぬこと、町人や百姓とは違ふものであると云ふことを痛切に自覺した。此時から自分は忠義と云ふ事の意義を非常に明かにしたのであつた。

▲欲しい物は何でもある

近所の竹馬の友に庄之進と云ふ澤山の遊道具を持つた兒があつた。其人の叔父さんは學者で、器用な人で何でもよく拵へる人であつたので、甥のために種々なものを造つて呉れた。又其父は右筆で江戸にも往來した人であつたから、江戸土產などもあつたらうと思ふ。

或日のこと彼は例の叔父さんから貰つたと云つて縫針で造つたホコを持つて、海老や魚をついて取つてをつた。自分は之を見ると、實にほしくつて仕方がない。庄公はよいものを持てをる、仕合せな男だと思つて家に歸つた。母は恰度おはぐろをつけて居る所ろであつたが、私が物思はしげに打沈んで居るのを見て、どうしたのだと聞いた。そこで私は、庄公は珍しいホコを持つてをつた。叔父さんが作つてくれたそうだ。私もアンナのがほしいものだと涙ぐんで母に語つた。スルト母はエライ勢で「何でも慾しいものはお母さんに云つて來い。お母さんは何で

も造へる、造ることが出來なければ買つてやる、人のものなぞ欲しがつてはだめだ。ほしいものは何でも云つて來い、何んでも作つてやる」と非常な勢であつた。其時私は母の其のほしいものは何でも云つて來い、何でも作つてやると云つた勢に感動して、何もいらぬ、何もいらぬと云ふ、無慾の氣を生じ、物を慾しがると云ふ心が全くなくなつた事を記憶してをる。實に此時の何んでもやると云つた唯一言は何も要らぬと云ふ無慾の感化をうけたのである。

## ▲母の臨終

私の母が絕れたのは私が十歲になつた五月十一日の朝、日の出頃であつた。其夜は非常に苦んだ樣で曉の四時頃に私に醫者を呼んで來いと云つた。私は裸足になつて薄暗い道を走つて醫者を呼びに行つた醫者の門前に立つて、呼び起した。幾何呼んでも中から應がない。やがて向側の家の隱居さんが早起して門の掃除に出て來て、呼んで吳れたが餘程よく寢つて居つたと見えて答へがないので、仕方なく歸途についた。途中で近所の親類が向から來るのに逢つた、變な顏をして急いで通つて往つた。後で聞けば之れは外の醫者を呼びに走るところであつた。歸つて見れば近所の人なぞが澤山來て、家の樣子が變つてをる。母は既に絕てをつた後であつた。其時の私の苦痛は實に何ともかとも云へなかつた。足を洗つて母の死骸の側に行つた時の私の心中は今日之を言葉に現はすことが出來ない。傍には母の母も居り、父もをつた。間もなく母の弟である八郞と云ふ叔父がやつて來た。おばア樣が云ふには、「八郞、死ぬる前に頻りにお前に逢いたいと云つて名を呼んだ此兒(私)をお前に托したいためであつたやうだ」と。其時何とも云へぬ一種の深い感じが、私の心を領した。死ぬる今はの時までも私の事を心にかけて叔父に私を賴まんとの念望であつたと聞いて、母を慕ふの情が一入深きを覺へた。そうして母の精神がさながら私の中にはいつて來た樣に感じた。其後五十日が間母の位牌の世話、茶や花や供物の世話の如き毎日毎

日一切私が一人で取りかへたが、母の沒後と云ふものは以上お話し申した樣な片言隻語が、非常な意義を以て私の心に現はれ、母の精神が私の心の隈々までしみ渡る樣に覺えて、四十餘年の今日まで、其印象は新しいのである。

# 人物を摸表とした教訓

三輪田眞佐子

## ▲母の胸から私の胸に

私の父は儒者で御座いましたから嫁いで參りました母も現今の學者も及ばない程漢籍は素讀致して居りましたが、字は知つて居ても現今の樣に敎育と申すものは薩張御座いません。私は姉妹三人で姉も妹も亡くなりまして、私獨は唯だ可愛がられて斗り、足を出すな、喋舌をすな位は申されましたが、これと申す程の躾も致されませんでした。唯私の物心付きましてから今日まで私を作つてゐる土臺とも根ともなつて居ります事は、母の胸から私の胸に移し植えられました菅丞相の御事跡で御座います。あの名高い「久方の月の桂も折るばかり、家の風をば吹かせてしかな」のお歌は幾度か繰返して申聞かされたので、あの歌の心をもつて私に偉くなれ〱と訓したので御座います。御承知の通りあの非凡な聖人の樣な菅丞相の御父君は儒者でお出になつて、位は六位、正か從かは判りませんが何にしろ六位藏人是善卿と申された方で御座います。其の頃宮中には六位の人は澤山御座いました位ですから、さして高位と申すので御座いませんので、母君は平素菅公に偉くなれと仰せられたものと見えます。夫からですか、公は遂に丞相さまで上られました。

## ▲菅相丞の故事に倣ふ

公が十一歳になられました時に、父君是善卿が或日公に儒者の家に生れて十一歳で詩を作る程の能なくては叶はぬ、如何にと仰せられました時、公は立ざころに詩を作られた。其詩は幼ない私の口に誦したもので韻などは判然致しませんけれど、大方此樣

な事と存じます。

月光如晴雪、　梅花似星光、
可憐金鏡轉、　庭上玉房香。

全體私は男兒に生れる譯であつたさうで御座います。立春に生れて、何か祥瑞もあつたとかで、且つは姉は妾腹であるので、家内では皆男兒とのみ信じて名も茂とさへ定まつて居りましたのを女兒であつた爲に梅濃と命けられたので御座いますが、後に之を號と致したのです。菅丞相を模範として育てられました儒者の家の娘は同じ十一歳の時菅公の故事に倣つて詩を作れと申されて作つたので御座います。

### ▲お轉婆になつては困る

夫より以前私がまだ十歳にも程遠い頃、大和巡りを致しまして、石山寺に紫式部のあとを訪ひました時に、母からしみ〴〵と式部の學才ある品位の高い婦人である事を聞かされましてから、式部は私の忘れられぬ人となり、何うかして式部の様にと思ひました。其の時私の詠みました歌は



今もなほ心にうかぶ水茎の
　あとをさやかに照らす月かげ

勿論其儘のものではなく様々に手の入つた事と存じますが、此が初めてので御座います。其他和歌作文には字が必要であるからと申されて、其頃叔父がた世話をして後に立派な御方になられた神山法陽と申す方に直して戴きました。幼い時から學問好きの私家が上京に御座いましたのを、師匠も多くあり書物などを購ひますにも便宜の好い中京の叔父の家に預けられて志す事を致ました。恰ど其頃は私が十六歳或日輪講が終つて神山氏が歸ります際私は金吉と申す學僕を伴れて送りましたが、別に何事も其時は心附ませんでした。處が翌日神山氏が參つて叔父に彼様申ました。「梅濃さんが昨日私を送つて下さつた時金吉が下駄を揃へたが夫を默つてツト穿いて仕まつた。其傲慢な素振りを見て、女が學問して傲慢なお轉婆なものになつては困ると心密かに憂へました」。と師の言葉は私の骨身に沁みました。今でも生徒に

度々申て聞かせます。女は僅かの事にでも謙遜に物腰卑くゝあり度いものと思つて居ります。

其の後博士松苗先生の門に入つて經綸の策を學び度いと申込ましたら、先生は今の世に女子が學問に志すのは稀であるから其志に賞でゝ入門を許したいが、實は薫の樣な傲慢な不具者を二人迄も作るに忍びないから今一度熟考して來よと仰せられました。此處に薫と申しましたのは私よりも十歳斗り姉で學識のある人で高貴の御方に御素讀を申上て居りましたが有名な憎まれもので傲慢の聞えが高かつたので御座います。其後暫らくして松苗先生に再び入門を願出ましたが此時は先生はお眼を患らはれてお出でで代講を山田梅東先生にお頼み下さいました。先生は後遂に失明となられました。夫れで前申上た通り菅相丞と紫式部を標準とした兩親の教育と師の訓へを今日とも肝に銘じて居ります。



## 剛腹な教育と鎖末な注意

櫻井ちか子

### ▲剛腹にせんため

私の父は以前神寳方の御用達と申て、武家とも附かず町人ともつかぬ事をして居りましたから、金廻りも中々よろしう御座いましたが、當今ならば銀行に預けるといふお金を、父は何故か兄と私に斗り出納を掌らせました。聞けば父の意思は一には子供が大金を見た時に驚かぬやう、二には心得違ひをして卑しい心を出さぬ樣と云ふ譯であつたそうです。幼ない時から大金を扱ひつけました私は何處のお家にも百や二百のお金は必ず何時でもあるものと斗り思つたのです。余り良い習慣ではありませんが自分は不自由をする場合に行詰つて迄も此れつ切りと云ふ觀念が持てませんで困ります。これは畢竟父が私共を剛腹にせんためであつたので御座います。

### ▲鎖末な事に注意

全體私は祖母育ちで、從て家庭の瑣末な事に至る迄何くれと注意されました、夫等が今に習慣となつて遺つて居りますが、昔は細かい處に特別に氣を用ひる樣にて躾けたものです。

近頃頻りに心に起ります事は此事で御座います。女は幼少から小學校時代迄に食卓の上で親しく親に躾けられて公德心の養成から禮儀の教育まで爲終る必要があると想ひます。都に修業に上つて來て身に余る程の仕送りを受ける程の家庭の子で、猶此躾を等閑にされてゐる子供があります。夫を見ますと先づ第一に其子の家庭が想像されます。例へば御飯を盛る時お櫃の中に深い穴を堀り、お香の物を取る時には他人構はず亂雜に取つて、お菜箸さへ揃へてなく、後の人に何となく不快の感じを持たせるなどの事が度々あります。御飯は上の方からそつくり取つて盛るがよし、お香物は端から取つて後の人の取りよい樣に揃へて置くがよしと。瑣細な事の樣ですが現今の人には斯樣した風の教育が缺けてゐると思ひます。然うして亂暴の舉動、他人かまはぬ自分勝手な振舞の罪は皆な寄宿舍に負はして了いますけれどなあに寄宿舍に入る前に已に家庭で此習慣を付けられなかつたのです。私の經驗では新入の生徒の方によくこんなのがある事を發見しました。或時老婢が蔭で言ふ事を聞いて居ますと「教育を受けた人の何のつてこんなお香の物の取り方をする、田舍者だつて無教育者だつてお香物の取り方位は知つてゐると言つて居る」と。

### ▲習慣となれば出來る

米國では御承知の通り雨天に上靴を穿いて泥靴では決して家に這入りません。一層喧ましい奧樣になりますと、外を歩いて來た靴は掃つても、磨いても土が附いてゐるものだからとて、家に入る度毎必ず上履を穿かせます、私の知人に恐ろしい喧ましい奧さんがあつて、或時卒倒したのです。直ちに人を馳せて主人と令息とを工場に迎へに行りますと。軈て奧樣が我に返つて、家内中胸撫で下した時に、不圖

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

氣が付いて主人と令息とを見ましたら、二人とも上履を知らぬ間に穿いて居られたとの事です。斯樣いふ風に小さい時から心を用ひて躾けられゝば年老つて迄の美しい氣風となるのです。又幼い時からの斯した躾けが、他人の利益を計ると云ふ公共の德を涵養することゝもなります。

家庭の中で口に出して言ふに足らぬ此等の微かな事が傍らの人の感情を害して、度重なつては終に家庭の圓滑を破つて、取上る可き程の原因なくて恐しい境遇に陷る樣な事もないと言へません。他人には箸の上げ下しにまで此樣な細い事は言はれませんけれども、子供には遠慮もなく感じも害さないで、注意して躾ける事が出來ると思ひますから、他所に出す前に親は充分に子供の躾をして出す事を望むので御座います。

### ◉お金を買ふ

此夏宅の末子が逗子で地引網を見まして樣々の魚か澤山に入て居ましたので自分もほしくなりましてしきりに地引網をこしらへて頂戴と申ますので、中々六ヶ敷くてこしらへるとは出來ないと申ますとそれでは買つて頂戴と申ますから、それも中々お高くて買へないと申ましたら、此度はどの位するのかと申ますから何十圓もするだらうと申ますと、しばらく考へてをりましたがそれではお金を買つたらいゝでしやうと申ますから、お金を買つてどうするのと申ますと、郵便配達をしたり新聞屋になつたりしてほう〳〵の家でお金を買つたらいゝでしやうと申ました。（みや）

### ◉太陽まで七年

ある食事の時月や星の話が出まして此地球から太陽までは大變遠いがどの位かゝつたら行かれるだらうと申ましたら末子が眞面目くさつて、それは大變ですよ私が死んで、私の子供が死んで、又其子が死んだ其長い〳〵間かゝて行かれますと、ねらひことを申ますから皆驚ひて聞て居ました、するとこん度はそれは何年位だらうときゝますとせめては五十年とか百年とか申かと思つて居ますと、どうでしやう、又眞面目なかほをして「七年」と簡單に申しました、面白いではありませんか。（みや）

### ◉小兒の復活觀

今年六才になる坊ちやんが四才の冬風邪藥と誤りて外用藥を服みましたとき、兩親は驚いてソレ解毒にと坊ちやんのいやがるのを無理に生卵子を飲せましたが、坊ちやんは二ツだけ飲んでモーどうしてもいやだと云ひます。母樣は心配して、もし毒にあてられると死ますよと勸めますと、坊ちやんは、死んだつていゝや、また生れて來るからと眞面目に申しました。（こう）

# 明治四十四年の回顧

## （昨年に於ける二の婦人問題）

明治四十四年は確かに我等の記憶すべき歳であつた。婦人問題と云つて別に數多く、又花々しく論ぜられたのではなかつたが、眞面目に冷靜に、研究的に、一二の問題に就て考へられたのは昨年の特長である。今少しく其跡方をたどつて見やう。

第一　は**女子高等教育問題**である。之れは必ずしも昨年に限つたことでもないが、然し昨年は特に眞面目に研究されたやうに思ふ。元來元の文部大臣小松原氏は頗る常識宗の人で、何でもかでも其方すから割出し、所謂賢母良妻主義を標榜して、實科高等女學校など云ふものを興し、男子教育方針と同樣、女子教育の方針も一種の復古的精神をとつたのである。高等教育論が叫ばれたのは其反動であらう。此問題は最早議論の時代を過ぎて結論に達して居るのであるが、新文相長谷場氏の教育方針も何等新しい方面なく、全然前内閣の後縱の樣であるから、當局の施政が變ぜざる限り、本年も亦論ぜらるゝ事と思ふ。夫れに關する議論としては多々あつたが、彼の**ジョルダン**博士が女子大學にて演ぜられた女子高等教育論の如きは慥かに傾聽に價いするもので、當時の新聞に雜誌に紹介されたことであれば、其影響するところは決して少くなかつたと信ずる。我等は女子の高等教育不可論に對する世人の謬想を打破し、女子の地位を高め、強めればならぬ。これ、ヨリ高き意味に於ての賢母良妻主義である。女子教育問題と關聯して、或は別途よりして、昨年の談論の中心となつた問題は、

第二　**女子解放問題**である。これは昨年の獨特の問題と云ふ事が出來やう。婦人の自覺と云ふことが頻りに叫ばれ遂に茲に至つたのであらうが、其原因としては英國に於ける女子參政權の運動なども其一として數へられやう又前述べた女子高等教育論もそうであらう。雜誌ホトトギスに、「自分は生れんとして此世に生れたのでない、父母が勝手に生んだのである」と云つた樣な極端な女性なども出て、與謝野晶子一派の女流文學者が、頻りに「新しき女」と云ふことを云ひ且つ考へ出したのも見のがすべからざる原因であつた。

然して更に一つある、夫れは彼のイプセンの「人形の家」劇の上場と、其の反響である。全體この「人形の家」は數年前に既に日本に飜譯もせられてあるが、社會の氣分と云ふものはエライもので、其頃は一部の文學者の外には何等の反響も惹起さなかつたと記憶してをる。然るに去頃文藝協會が之を試演した時は、中々の好評で、一部の看客には深き印象を與へ、涙ん絞る者もあつたとの事である。夫れが帝國劇場に演ぜられた時果して何程の反響があつたか知らないが、茲でも慥かに或種の新しい人々に印象するものかあつたと信ぜられる。

此の問題に對する世論はまち／＼で、反對者あり、急進論者あり、漸進論者ありて、極めて區々である。然して當局は斯る事件に對しては如何なる態度かと云へば無論別に明言もせぬが、其教育方針よりおして見ても反對であることが分ると思ふ。其實業教育を勵獎し賢母良妻主義を高調する所に暗々に夫れを語つてをる。思ふに此問題の我國に於ける前途は尙遠いが、然し其流れは間斷なく進んでをる。今日は云ふまでもなく其初葉であるが斷ずして流るゝ水は遂に堰き止むることは出來ない。我が國が世界の文明と並行しない限り、歐米の思想は日に月に國民の腦裏に浸潤して新しき自覺が叫ばれると共に愈盛に此問題が論ぜらるゝであらうと思はれる。（聖）

# 聖書が唯一の讀物

(故小林富次郎翁の事)

靈星子

故小林富次郎氏が聖書の愛讀者たるとは知らぬ人はなかつた。彼れの唯一の智識は聖書によつて得たと云ふとが出來る。實際之れと云ふ敎育がなく、且つ目が不自由であつた小林氏に取つて聖書は殆んど唯一の讀み物であつた。彼れが家庭にある時は、朝起き顔を洗ふや否や、先づ机に向つて瞑目少時、直ちに聖書を繙いて或は一章、或は二章を誦讀し、卷を閉じて後ち、簡短なる祈禱を捧げるを以て第一の日課とした。一時店から別れて小石川丸山町の住宅に居つた頃は、妻女を初め、下女下男に至るまで、一家を擧げて朝の家庭禮拜につどはしめ、自ら聖書の講義をして年中變る事がなかつた。又た店に同居して居つた時は店員殘らずを、二階の廣間に集めて同じく聖書の講義をした。固より小林氏は學問的に聖書の研究をした人ではない。故に其講義は何處までも常識的で、自己の經驗より來つた小林氏一流の解釋を施したものである。從つて中には隨分無理なところもあつたが、一々自己の實驗に照して一種の解釋をするのであるから專門の學者も及ばない程の妙味があつた。而して斯くの如く玩味し得た所の聖書の敎訓は、必ず之を實行に現はさんと心懸けた點は、小林氏の最も偉らいところであつた。

彼は比較的無敎育で、何等の新智識を有せなかつたに拘らず、能く海老名牧師の最も進歩せる神學思

想を解する事ができ、且つ其主張に對して滿腔の同情を注ぐ事を得た。海老名氏が曾つて眞に余を知るものは小林君あるのみと云はれたことがある。眞に小林氏は海老名牧師の最高最深の宗教思想に同情同感し得るだけの宗教的修養を積んでをつた。宗教の事は教育の多少によるものでないと云ふことが之れでもわかる。彼れは實に何事も悟りの早い人で、聖書の難解の出所の如きも僅かに、暗示を與へさへすれば、あゝわかりましたと云つて、全體の意味を了解するを常とした。

小林氏は自宅用の大形の聖書と旅行用の小形の聖書と二冊を持つて居つたが、其どちらの方にも黑赤靑の鉛筆を以て餘白のない程色々な事が書き入れてある。無論度々聖書を讀み返したのであるから、前年靑鉛筆で感じを書いてある所には、今年赤鉛筆で更に新しい感じを書き加へると云ふ有樣であつて、試みに詳しく其書入を研究して見れば、小林氏の信仰の發展の道行きが歷々とわかるのである。今其の



書入れの中、數個の例を擧げて見やう。

一　約翰傳第二十章第十七節「わが兄弟に往きて云へ、我は我父すなはち爾等が父、わが神すなはち爾等が神にのぼる」の上には「同父同神、此ノ御言葉ニヨリ人間ノ幸福ハ無限ナルヲ知ル」と書入てある。げに此一句は小林氏が最も深く玩味した愛讀の句であつた。「わが父即ち爾等の父」と基督が宣ふた所ろに基督教の奧義が言ひ盡されて居ると彼れは屢々人に語つた。

二　路加傳第十四章二十八節以下、基督が弟子に向つて「爾等誰か城を築かんに、先づ座して其の費え此事のおはるまでに足るや否やを計らざらんや」云云と云はれた記事の上部には「以下事業ヲ興ス者ノ奧義ナリ。此御言ハ眞理ナリ我充分ノ經驗ヲ得タリ此奧義ハ子孫ニ申シ傳ヘン」と書いてある。事をなすに當て熟慮深謀、先づ充分に豫算を立てゝ其方法の如きも錬りにねつて後ち斷々乎として之を行ふと云ふ風が小林商店の始終かはらざる方針であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

小林氏は餘程よく此の教訓を服膺したものと見える。

三　馬可傳第十章三十五節以下の有名な言「異邦人の君と見ゆるものは其民を治め、又大なるものは彼等の上に權を執る、されど爾等の中にては然ずべからず、爾等の中大ならんと思ふものは爾等に役はるる者とならん。又爾等のうち首たらんと欲ふものは凡て人の僕とならん。そは人の子の來るも人を役ふ爲にあらず、反つて人に役はれ、且おほくの人に代りて其命を與へ贖とならんためなり」とある個所には「以下我ガ店則ノ奧義、卽一家ヲ治ムルニモ、一店ヲ經營スルニモ、一會社モ一國家モ同樣、其首領タルモノノ深ク心得ベキ奧義ナリ」と墨黑々と書き入れてある。人の頭たらん者はかへつて人の僕となるべしとある教訓は小林氏の全力をあげて實行せんと努めた所であつて、彼が能く店員を心服させた秘訣は實にこゝにあつた。小林氏が如何にその店員に敬慕されてゐたかは、大阪支店の丁稚小僧までが大主人の來阪を喜ぶこと非常で、氏の滯在中は店中、何となく喜びに滿ち、一層元氣よく立ち働き、本店に歸られた後には、此次は何時た出でだらうと頻に其日を待つた事でもわかると思ふ。

四　馬可傳第七章十四節以下「イエス又衆庶を呼びて彼等に曰ひけるは爾等みな我言を聽きて悟れ」とある簡單なる一句の上には「悟ハ本心ノ開發ナリ、悟レト云ヒ給フニ就テハ我等ノ内ニハ必ズ主ト同情同感悟リ得ルダケノモノ有ル事ヲ喜ブベシ」と記入してある。「悟れ」の一語にかくばかり深き意味を見出した小林氏には、餘程徹底せる自覺があつたらうと思はれる。

此外使徒行傳第十一章二十九節、異邦の弟子等が猶太の兄弟の窮乏を救はんために金品を贈る記事の個所には「信者タル者ノナスベキ義務ナリ」と書し、路加傳第十六章十五節「神は爾等の心を知れり」云云の個所には「コノ御言ニハ我大ニ恐ル、先ヅ神ノ前ニ正シカレ」と記し、腓立比書第一章十二節以下「我が生けるは基督のため、又死ぬるも我益なり」

とある所には「信仰ノ力ト勇氣ノ深サハ玆ヨリ出ヅ」と書し、同じく二十八節「凡て敵に驚かざるは敵には亡びの徴、爾曹には救の徴なり」とある所には「大膽ノ行爲ハ却ッテ安全」と書き入れある。

之を要するに小林氏は人生に處する一切の活ける敎訓を聖書の中に見出して、之を實行に試みて悉く其眞理なるを確めたのである。故に彼の聖書の智識は活ける智識である。理屈や研究で得た智識ではない。聖書の一言一句の味ひを何處までも嚙みしめてそこに限りなき妙味と滋養とを見出し得たのである彼の死後其の愛讀の聖書を詳しく調べて見て、一層敬慕の念を深うした。小林家は此二冊の聖書を何よりの家寶として永久に保存されるであらう。そうして之に依りて得たる小林氏の信仰も亦た永久に其子孫によつて傳承されるであらう。

こは加藤氏が此頃著されたる小林翁の傳記中の一節なり。餘り興味多ければ乞ふてここに揭載しぬ。

# 忘れられぬ二の聖誕祭

安井哲子

## 其の一

私が英國に參りましたのは五月の末で、九月から新學期が始まつたので入學したが、元より知己があるではなし、唯だ篤き師の君の愛顧を何よりの力として勉强したのであつた。師の君ヒユース孃は英國南ウエールスの人で醫師の娘であつた。その母君は極めて昔氣質の人であつたが、父君は非常に進步した頭を持てをる方で、多くの子女の中で一番ヒユース孃を愛し、彼女も亦非常に父君を愛慕せられたのであつた。然し斯く互に相敬愛した親子の間柄でも師の君の事業と住居の隔たつて居るのとは、しみじみと相逢ふて相語り慰め合ふ機會を少くした、父

君も唯一回娘の事業を來て見ただけで、之は我が師が常に遺憾とせられた所であつた。

十二月半の事である熱心に授業をしてをると小使が電報を以て教場に入り來り師の君に手渡した。彼女は一瞥しただけで、余念なく定刻まで教授し、終りて後コツソリと行李を整へて歸省せられた。誰れも夫れを知つたものはなかつたが、事務所に言ひ置いた所によると父君が危篤ゆゑ歸省するとの事であつた。私は其悠揚として取亂さざる態度に益々敬慕の念を深くしたのであつた。やがて一週間ばかりすると私に便りがあつて、先づ父君の訃を知らせ、併せて、母と弟と女中と大人ばかり四人では淋しいから、此クリスマス休みには是非來よとの事であつた。そこで私は英國に於ける最初のクリスマスを英國の田舍の師の君の喪中の家で迎ふる事となつた。

何と云つても死は人生の悲哀である。然も夫が尤も敬慕してをつた父君の事であるから、顏にこそ出さね、師の君の御落膽は實に一通りではなかつた。そうして母君の御心中も亦た察するに餘りがある。母君は此年七十餘の高齡で然も病身であるので、ソファーの上に朝から晩までじつと寐んで居られるのである。其處に私はクリスマスを迎ふるのであつたされば元より陽氣な快活な所はある筈もないが、然し實にシンミリとした、何とも云へぬ居心地のよい、所謂アトホームの感は、私の心中に生涯忘るべからず印象を受けたのである。

クリスマスの夜と云つた所で忌中の事なれば、クリスマスヂンナーにお定まりの七面鳥や干葡萄やの御馳走で心ばかりのお祝をするだけで、別に贈物の贈答があるとか遊び事をするとか云ふことはない。又滯在中は時を見計つて、母君の傍に集まり、日本の風俗談や四方山の話に病人を慰むるのであつた。茲に一つの忘れられぬ事がある。夫れはクリスマスの日の午後、師の君と共に街の八百屋に御馳走の買物に行つたことである。私は彼が何かと命じてをる傍らに物珍しく夫れからそれと見てをると、師は突

然「何か欲しけりや買つて上げませう。」と云つた。丸で我子か孫をつれて買物に行つてをる態度である。私は一々見まわして見るけれど、所かわれば品變るとやら、どうも之と云つて欲しいものがない。兎角する中に乾栗を見出した。栗は私の大好物である。私は「早速あれを買つて頂戴」と云つて買つて貰つて、又打連れて歸つた。其時自分は熟ら思つた。ア丶何と云ふ愛にみちた子弟の取扱ひ方であらう。三十に近い自分を捕へて子供のやうに「何か欲いなら買つて上げませう」とは實に慈母の態度である。私は徒らに權威のみ振りまわされて敎育する日本の學校から、斯る師の下に來つて、親しく愛顧薫陶を受くることを、しみ〴〵と感じ、且つ自らも子供の心となりて「栗買つて頂戴」と云つた事を思ふて、自分ながら、其心の變化に驚かざるを得なかつた。之れは決してヒユース先生が、私の母と同じ年輩位であるからではない。彼女の愛に滿ちた德風が、知らず〳〵の間に自分を斯くならしめたのである。

夫れから間もなく、私は約束があつて外に參つたので、此栗は遂に其まゝ殘して置いたのであつたが、他の生徒より四五日早く學校に歸つて居ると、曾つて師の君の薫陶をうけて、今は印度に渡り彼地の女子敎育に身を捧げてをる某女史が久し振りに歸國したので其人に逢ふために師の君も未だ休みのあけない中に歸られました。其時これは田舍からのお土產ですと云つて出すのを見れば、私が忘れておいた干栗であつたので、私は早速夫れを煮て三人でドローイングルームのストーブの傍に坐して、之をむいて食べながら物語りつゝ、師弟と云ふ感念を忘却して幾夜となく冬の夜の更くるを忘れたのは、思ひ出すだに興ふかきことである。

### 其の二

次の年のクリスマスは曾てヒユース先生の薫陶を受けた一人の女流敎育家の宅で祝つた。之より先きこの年の夏、其人の經營してをる女學校で、師の君が、一場の講演をされた事があつた、私はお供をし

て其學校に行つたのであつたが、其時彼女は今年のクリスマスには是非私の宅に來て下さいとの事であつたので、第二年の聖誕節を偶然にも其家にて迎へることゝなつた。彼女の父は銀行家で彼女は非常に名高い文學者で、同時に敎育家であつた。又其姉と妹とは、彼女を助けて、姉君は家政裁縫を敎へ、妹は理化學を受持つて姉妹三人で心を協せ、熱心に育英の途に盡して居られると云ふ誠に感ずべき家庭であつた。

　私は其家庭で實に興味のあるクリスマスをしたのであつた。一體英國のクリスマスは家庭的であるが、此處でも全く身内の人ばかりで、所謂水入らずであつた。そこに私も招

かれたのであるから、何から何まで、内の人同樣で他人行儀な所など少しもなく、他所に行つてをる娘か妹かゞ歸つて來たと云ふ風で全く旅の空と云ふことを忘れたのであつた。

　そこで尤も興味ふかく感じた事はクリスマス、ヂンナーよりも、クリスマスの遊戲よりも、其のプレセントであつた。此家の習慣として、年々家内中で贈り物をし合のであるそうだが、夫れには各自が互に氣をつけて居つて、お父樣の尤も必要な品は何であるか、お母樣の一番ほしい物は何であるかと云ふ風に先方の必要な氣に入りそうな品を、密かに見定めておいて、夫を自分で製るなり、買ふなりして、此日に贈り

交ふのであるが、其喜びと云つたらない。例へば末の娘は晴衣が必要だから、母親が内密で求めてをいて送れば、「ア、眞個に有難う、これは恰度私の慾しい物でした」と感謝に溢れ、中の娘は學校の經營に資金が入るからと思つてお父樣が現金で金子を贈ると「サンキユー、フアザー」と喜びに滿つると云ふやうな有樣で、女中や私にまで各自が心をこめた贈り物をするのであるから、其興味のあることと云つたら實に言語に盡されない程であつた。此のクリスマスもなか〳〵に忘れられないものゝ一つとなつた。クリスマスと云へば恰度日本のお正月の樣に、英國ではすべて家庭的のものである。日本の樣に會堂でお祭りさわぎをすることは英國では見られぬ現象で、會堂ではクリスマスの朝、嚴かに聖餐を守り、クリスマスに關した禮拜說教を聞くばかりである。私は日本のクリスマスを迎ふる毎に何だか物足らぬ心地がするのである。（談話筆記　文責記者）

# 花の光

倉橋惣三

## 一

むかし〳〵の其の昔、和助は山へ松ぼつくりを拾ひに行きました。愛子は川へ人形の着物の洗濯にゆきました。

「とんぷりこっこ　ぷつこっこ」

川上の方から小さな桃が一つ流れて來ました。愛子はそれを拾ひ上げて、和助と半分わけにしようと家へ持つて歸りました。

和助が歸つてから二人で其の桃を割りましたら、中から小さな種子が出ました。

「桃栗三年、三年目、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

　花も咲いて、實も結べ」

斯ういつて歌ひながら、二人でお庭の隅へ其の種子を蒔きました。

三年たつた、和助と愛子が三つ大きくなりました。種子から生えた桃の木にも、花が咲いて實がなりました。二人は亦その種子を澤山に蒔きました。

また三年たちました、新らしい木に花が咲き實がなりました。

斯ういふ様にしてまた三年、また三年。始めはお庭に一パイになり。次には村に一パイになりました。和助がお爺さんになりました。愛子がおばあさんになりました。國一パイの桃林になりました。

## 二

さて或る歳の春の夜のこと。

一人の鬼が二人の家へ訪ねて參りました。見ると折れた角を繩で縛つてぶらりんと提げて居ます。さも／＼恐れ入つた恐畏の態。

「實はその私は」

と、角のない頭を丁寧にさげて、

「實はその私は、昔の昔大昔、桃太郎さんに征伐されたあの鬼の子孫にあたるもので御座います。それは先祖も惡う御座いました。素より惡いには相違御座りませんが、さりとて桃太郎さまのなされ方も餘りといへば餘り。力まかせに角を拔いたり、熱いお灸をたんとすえたり。それで眷族は大低亡びてしまいましたが、生き殘つた者は流石にくやしくてなりません。桃太郎さま分取りのあの寶などが惜しいのでは御座いません、勝ちに任せてのあのなされ方、あのお心がくやしいので御座いました。」

桃林をもれた朧月が力のない鬼の顔を照らす。

「しかし、それも昔のことで御座います。今では生き殘る眷族も私たつた一人。一人ではありますが鬼で御座います。持つて生れた角もあれば意地もあります。いつかは昔の復仇がしたいものだと、つい此の間まで思つて居たので御座いました。なあに、力

づくで來りやあ乃公も鬼だ、人間なんかに負けるものかと、時節の來るのを待つて居ました。」

花に映ゆる月の影が一段とあかるくなる。

「ところがどうも年々の花盛り、山の奥から谷の底まで、國一面の桃林に私の隱れて居るような處もなくなりました。それに、此の美しい花の色、どこともない花の香、花で包み花で抱ける春景色に、さすがに鬼の氣も和ぎました。正直のところ力づくなら相手にもなりましようが、人間の方でこう優しく出ちやあ鬼には全く手の出しようが御座いません。——實はそれで御覽の通り斯う角を折つてお庭前まで上つた譯で御座います。

# 熊ちやんの夢

野口せい子

母ちやん！熊ちやんはお母さんにうんと打たれたよ、痛さうだつた！と如何にも驚いたと云つた風に光ちやんが歸つて來ました。熊ちやんと云ふのは直ぐ前の撚糸屋の年期小僧で稀に私共の目に入る位而して大方家の中に居て何かと働いてるまだ十歲だとかいふ色白の可愛い子供であります。光ちやんがお母さんと云ふのは其家の女主人で人の子を犬猫とも思はぬ淺ましひ人であります、私は熊ちやんは何な惡い事をしたでしよう、可愛相だけともお母さんの言を聞ねば仕方がありませんねと申しましたら、丸い目を更に丸く見はつて、あのねお風呂の水を入れるのに愚圖／＼して居たもんだからと年にも似合はぬ增せた言を申ますがこれはそのお隣のおばさんに聞いて來たのでしよう、而して此糸屋のお神さんが子供を慘めにするのは名高い話で、知つてる者は皆眉をひそめて噂をして居ます。

秋とは云ふものゝまだ日中は暑い、つく／＼ぼうしが盛に啼く、撚糸屋の入口には南瓜の棚があつて

黄色の大きな花が勢よく咲いて居ます、その横に名斗の風呂場があつて其處に毎日お湯を立てますが今日は水汲む番が熊ちやんに廻つて來たのでしよう。朝の御飯を終つてからせつ〴〵と始めて八時が過ぎてもまだ桶に一杯にならぬ。余り遊びが過ぎると云つてお神さんが荒れ出したといふ事です、素より裸で始めたから着物を剝ぐ譯には參りませんが其儘で何處へでも出て行けとピシヤ〴〵とたゝき氣まぐれに物でも擲く樣に白い軟い肉を擲いたそうです。其時熊ちやんは泣いてましたかと尋ねたら否泣かないで御免〴〵と地に這ふて居たと申ます、私はとんだ見物をさせたと恐ろしい思ひが致しました、一體此な年期小僧等に來る人の素性を探つて見れば皆一通りならぬ悲惨な境遇の者斗りでありますが、此熊ちやんも矢張そうであります。此處から十里斗り山奧の何とかいふ町の在に、貧しひ家の薄い情の兩親に産れて、去年九歳の春から犬一匹と思つて養つて呉れと捨てる樣に置いて行かれたのだそうで、如何に非道い目に會はされても拜む斗りに詫びをしては冷めたい夢を續けて居るのです。私共が特別に此熊ちやんを知る樣になつたのは今年五月五日の節句の日に見馴れぬ子供が他の仲間に加はつて私の庭に來たから此れは何處の子だらうと云つたら皆が年期だと申ますから始めて合點が行きました。私は不思議に此小僧を捕へて話を始めてその父や母の事も尋ねて見たが一向氣乘りもせぬらしい、奉行は辛くて家に歸り度はない・かといつたら只默つて頭を振る、繼母でゝもあるかと思へば然うでもない、學校には一日も上つた事はない、字といふもの一つも知らぬ。と、かう色々話をして居たら耳の早い光ちやんは聞きつけて此頃覺えた「ノ」といふ字「ク」といふ字「チ」といふ字だのを折から乘り廻つて居た三輪車の上から空に書いて得意に敎ゆる。私が色々な話を持出すと平氣でいふ丈け涙である、朝は五時に起されて夜は幾つとかの枠を上げねば寢られぬそうな、御飯は四分六分などゝ一寸考へても何の事だか分ら

ぬ事迄いふ、一ヶ月の中一日と十五日は鹽鮭の御馳走だが、不斷怠けたり仕損じたりしたものは之にもありつかぬと萬更空言でもないらしい、それが今日はお節句で朝からの休業、十錢のお小使迄あるので籠の鳥が飛ぶより嬉しい一日の自由、熊ちやんは二錢か三錢の繪本を買つて大事そうに胸に入れて居る、殘りはお饅ぢうを買つて喰べたとにこ〳〵して居た。

家のお父さんは毎日時計屋のおぢさんに雇はれて行くといふが極つた仕事のあるのやら、お母さんは山に枯木を集せたり、木の葉を掻いたりして日を暮すらしい。小さい妹が一人あるとかで或日お母さんと何時もの樣に山に行つて遊んで居たら、不思議に見へなくなつた、お母さんが驚いて探したら深い深い谷底へ落ちて石と石とに頭を打附けて泣いて居た、生命は助かつたけども未だ全く快らぬ、お醫者樣より按摩さんの方が早く快くなるそうだよといつて淋しく笑つた。而して何でも私と話すのが五月蠅いといふ風に時々空惚けて居る、私も罪な事だと思つて光ちやんを呼んで此人に三輪車を貸して乘り樣を敎へておやりなさいと命令けた。光ちやんも喜んで三輪車をゆづつて熱心に足取りを敎ゆるけれども仲々堅くて動かぬ、熊ちやんは乘れるまでは乘り度い風に見へた。

風呂と御飯を濟まして薄闇の表通りへ出たら、さきの熊ちやんは矢張り同じ年期らしひ仲間と三人で鬼ごつこをして居た、嬉しかつた今日一日は遠慮もなく暮れて行く、けれども中々家に入ろうとはせぬ早く歸らぬと又いぢめられるぞとお隣のおばさんが注意して居た、私と光ちやんの顏を見て人の好ささうなその人が挨拶をする。前の鳥飼ふ男も障子を明けて顏を出した、まーあんなで居て皆すれつからしのどうにも手のつけ樣がありませぬ、それも其筈だ如何な寒中でも裸にして霜の夜に立たせたり、食はせずに押込めておく位は平氣ですから當前の人の親なら迚も見て居られぬ、あれで十年の身の代が十圓

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

か二十圓とは、全で犬猫も同樣ですよといふ、私今日始めてあんなのが前にもうしろにも居る事を知つて驚いたと口を添へた、生命の始めにふみにじられた若草は如何ばかり春の光りに温められても、もう駄目である。人の顏が全く見へなくなつた頃には嬉しそうなあはれな聲はなくなつた、今夜斗りは夜業もないから早く寢られたろうか。熊ちやんは運送屋のおぢさんが時々尋ねて來るといつたから荷車にでも乘つて父さん母さんの家に行く夢でも見たらうれしかろう、徴兵までは務めねばならぬと十歳の子が徴兵檢査が來年にも來さうないひ振りである、徴兵檢査、それは彼等に云ひしれぬ自由の憬れを刻んで居る。光ちやんの家は嬉しそうに時々笑つて居る母ちやんは熊ちやんと其人の運命が妙にもつれて頭を去らぬ。春は行き秋が歸つて、もうすぐに又春が立つ、十歳の熊ちやんは十一歳になりますけれども二十歳まではまだ中々のことで遠い世の心地がします。晝の中はそうでもありませんが夜の靜かな空氣を破つて水車の響きのたへま〱に切ない樣なそれでも彼等にはいひしれぬ心やりであろう何ともいへぬ鄙調の唄が聞えて來ます。私は之を彼等のうなり聲だと感じてきく、昨日も今日も明日も明後日も、かうして彼等が十年の夢は氷の樣に結ぼれて一生解くるすべもなかろう。

夜の更けて我耳にすむざれ唄の
をさなき聲に涙するかな。

# 星の話

新井生

なんぢ昴宿の鏈索を結びうるや參宿の繋縄を解うるや

（約百記三八〇三一）

耶蘇さまがお生れになつた時奇しき星が天の一方に顯はれて東方の博士等を導いた事は誰も御承知のことで、クリスマスと星とは離るべからざる詩趣を

以て居ます。今此クリスマス號に星の話をものせんとて、出でゝ蒼天を仰ぐと、さながら千九百年の昔しのユダヤの野邊に立つたやうな氣が致します。

冬は天文學者の天だと申します、冬になると弱虫は炬燵に噛りついて寒むがつて居るのに、天文學者は最も喜んで寒夜に外に立ちて天を仰ぎます。何故でせう、冬は一年中最も水蒸氣が少い時で霞や雲がなく、一天限なく晴れ渡りますから、星の數もよく見え、其光も冴えて美しくなるからです。尙其上に丁度十二月から二月頃までは夕方から、古人が神の御座又は天の中心と考へたほどに、大きな美しい星が群がつて居る星座が一目に見ゆるからであります。夏や秋も其の星座が見えない事はありませんが夜の十二時過とか曉方とかでなければ見えません、その上に天氣が曇り勝ですから其の美しい光を認むる事が困難であります。

夫れで星の美を見るには此頃が一番よいのです。試みに午後七八時頃に外に出て大空を仰いで御覧なさい、南東の方から三つ列んだ俗に三ッ星（又は三條軒といふ）が昇つて參ります。是れが初めに引照しました約百記三十八章の莊嚴なる聖句中にある參宿と云ふ星です、此は大抵のお方が御存じでせう。此の三つの星を少し強い光の四つの星が圍んで、不規則なる長方形をなして居ます。其の北東の角に當る星はベテルグースといつて紅い色をして居ます。三つの星の下の方（南方）にボンヤリしたものがあります。此は有名な星雲で望遠鏡で見ると實に美しいものであります、此等の七つの重なる星をオリオン座と申ます。大將軍と云ふ意味です、三ッ星は此の大將の佩劍の帶に當ります、聖書の參宿の繫繩と云ふのは此帶の事です。之は古のギリシャ人が七つの星の座を、片手に劔を持ち片手に楯を以て戰に向ふ有様をして居る大將軍に象つたものであります。凡て星座は一群宛、動物や器具などの形に宛てはめてあるので、勿論ハッキリしませんが繪に書いたものを見ると丁度アダム、イブの昔噺の畫を見るや



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

うな神秘の氣に打たれるのであります。
此三ッ星を貫いた線を一直線に南方に引き延して見ると非常に强い青味を帶びた光の星があります。此が有名な天狼星と云ふ第一等の星であります。普通の一等星より遙かに大きく見えますから、等外となつて居ます。又其直線を今の反對に三ッ星の北の方へ引き延すと天狼星に劣らぬ强い光の、而も紅色の星があります。之は金牛座のアルデバランといふ有名な星です。而して其の近くに一團の星の群が極めて密接して居ます。之は昴といつてやはり金牛座の中に入れてあります。聖書に昴宿とあるは此の星座の事です。天狼星が狼の眼のやうに大きく輝いて居るに對して、アルデバランは金色に光つて居るから金牛座といふのださうです。
　オリオン座を中心として南北に斯の如き青と紅の强い大きな星があり昴があり、而して其東に天の河が横はり河を越えて又色々の大きな星が閃めいて居りますから、古人が此邊に神が鎮座し給ふと考へたのは無理のない事です。聖書の中に此邊の星座は約百記に二ヶ所亞摩士に一ヶ所都合三ヶ所に記してあるのを見ても（約百九の九、亞五の八）古來人の注意した事がよく分ります。而して此の美麗莊嚴なる榮光は冬の夜でなければ見ることが出來ません。此等の星は恒星であつて、幾年經つても其の位置はあまり變りませんから神が天地を創り給ふた時より幾億萬年の今に至るまで、同一なる光景であると思はれます。彗星や明星は地球に近いから大きく光つて見えますが、遊星ですから望遠鏡で見ると光が濁つて見えます而して位置が常に變つていけません。幾億萬年前からの星を位置も光りも其の儘に、毎年クリスマスの天に見るを得るのは如何に幸福でせうか。而して此等の星は昔し東方の博士を導いた如く今は航海者を案内して安全に港に導きます、嗚呼主イエスキリストは青きシリアスの如く、紅いアルデバランの如く、昔も今も常に變らず輝き給ふて、吾吾人類を安全に永遠の港に導き給ふのであります。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 子供の歌園

（ステーブンソン）

赤星生譯

◎星明り

一 狩人星や　犬の星、
　水夫の星や　軍星、
　空一面に　照り渡り、
　お手水鉢の　其なかを、
　半ば充たせる　水の面、
　其處にも星は　輝けり。

二 あら母さんに　見つかつた。
　ばあやも後から　隨いて來て、
　無理にお床に　入れられた。
　寢ようさ瞼　つぶつたが、
　數へもきれぬ　星明り、
　暗にちらつき　寢られない。

◎お舟の行衞

一 水鳶色に　砂明かく、
　川は兩手に　水を抱いて、
　さこしなへにぞ　流るめり。

二 浮ぶ木の葉や　泡の城、
　さて手造りの　小舟まで、
　落ち着く果は　何處ぞや。

三 水車場をも　過ぎ行けば、
　舟は谷間を　打くぐり、
　丘の麓や　廻るらん。

四 行けや我が舟、　百里でも。
　何處かの岸で　子供等に、
　歡迎せらるゝ　身の上ぞ。

◎面白い遊び

一 我等二人は　お二階で、
　壞れた椅子を　細工した。
　中に枕を　二つ入れ、
　梯子の波を　漕ぎ出でん。

二 釘や鋸　舟道具、
　玩具のバケツに　水もある。
　「持つて來ませう　富ちやんや、
　林檎一つさ　お菓子をば。」

三 之丈けあれば　おやつまで、
　我等二人は　大丈夫よ。
　斯くて梯子の　昇り降り、
　其の面白さ　類ひなし。

四 するさ悲しや　人形の、
　富ちやん落ちて　怪我をして、
　可愛相にも　病院よ、
　後に殘るは　我れ一人。

◎お日樣の旅行

一 坊やが毎晩　寢る時も、
　お日樣決して　寢はしない。
　地球を西へ　東から、
　來る朝毎に　現はれて。

二 眞晝の間　坊や達、
　明るいお庭で　遊ぶのに、
　ロンドンの子は　眠むたそう、
　夢を見ながら　床の中。

三 夕飯食べて　坊寢れば、
　太西洋の　夜が明けて、
　西洋の子は　床を出て、
　着物着更へて　お早うよ。

◎紀念の水車

一 爭ひ嵩じ　癇ぶりて、

寄しはすまじ　寄さじと、
逐ひつ逐はれつ　廻ひ抜けて、
垣根を繞ねて　掻潜ぐり、
二人小川を　岸傳ひ。

二　水車の響りは　雷か、
堰には泡を　後にして、
水門潜る　其早さ、
未だ家路の　近かれど、
魂消る事の　多かるぞ。

三　村の聲々　いや靜か、
啼く鳥の音も　細り行き、
水車小屋なる　番人は、
眼の曇りに　眼もかすみ、
車の音に　耳聾ひん。

四　幾年月か　過しけん、
運る車の　小止みなく、
我等の爲めに　今も猶、
泡立ち吼ゆる　其音は、
我等去りても　とこしへに。

五　山より家に　歸る者、
海より家に　歸る者、
なべては常に　聞き出でん
古き水車の　此の音を、
水泡立たす　其音を、

六、今より後に　二人若し、

争ふ事の　ありもせば、
豆と人形と　持ち出でゝ、
今日の和睦を　思ひ出に、
水車の傍に　打ち笑まん。

## ◎お月様

一　丸いお顔は　時計の様、
町でも野でも　波止場でも、
塒の鳥でも　皆照らす。

二　夜が天下の　鼠より、
猫や蝙蝠　犬までも、
お前の光り　大好きよ。

三　だが働いた　もの皆は、
子供も花も　今眠る、
お日様父も　登るまで。

## ◎寢床はボート

一　坊やの寢床は　ボートだよ。
ばあやも一緒に　寢卷着て、
暗い沖へと　漕ぎ出づる。

二　夜甲板で　友達に、
左樣なら云ふて　眼を閉ぢて、
漕ぎ出た後は　見ず聞かず。

三　用心深い　水夫まれて、
時には何か　持ち込むよ、
落雁幾つか　いゝおもちやまで。

四　一晩暗に　舵を取り、

終に夜明けて、　我が部屋に、
上れば其處に　おめざあり。

## ◎鏡の川

一　流れ滑らの　鏡川、
此處にさゞ波　其處光り、
清きに小石よ　澄む水よ。

二　帆走る花に　銀の魚、
舗石紛ふ　面清き、
中に住ふは　我が願ひ。

三　林檎の蔭の　水鏡、
寫してや見ん　友どちと、
冷たく澄める　此川に。

四　風波立ちて　碎くまで、
小蟹泳いで　濁すまで、
小魚躍つて　亂すまで。

五　逐ひつ逐はれつ　波の紋、
やがては暗く　曇り來て、
母樣燈しを　消したごと。

六　暫し忍べよ　子供等よ。
擴がる波の　絶えもせば、
やゝに流れも　澄み行くを。

## 家庭

# 子女教育に對する母の務（其十八）

海老名みや

私は今日まで右の表題の下に子女教育に對し、母親になすべき本務を、幼兒より小學時代と、空理空談に走らず専ら實驗を土臺として、十數回に亘りて卑見を述べました。而して前回に於ては遂に中學時代の男兒に關して記述しましたが、問題の性質上、高等女學校時代の女兒に就ても意見を發表せねばならぬので、今やいよ／＼其所に到着したのであります。然るに私は中學時代の男兒を教育した經驗はありますが、まだ高等女學校時代の女子の經驗はいたさないのであります。夫れで私は經驗ある一人の友人に依賴し、記者をして其御意見を聞かせたのが、卽ち左に揭ぐるところの者であります。

## 高等女學校時代の少女に就て

私の子女教育の方針と致しましては、小學時代はア、してはいけない、コウしてはいけないと、一々教へ導いたのでありますが、高等女學校時代ともなれば干渉主義を廢して、一に本人の判斷力を以て、諸事を決するやうな方針をとつてをります。そうして小學校時代は何事も親が氣をつけなければ、自ら治むると云ふことは出來ない時であるから、一々面倒を見てやるのでありますが、中學高等女學校時代となれば、完全ではありませんが、兎に角自治と云

ふ域に達したのでありますから、何事も自ら判斷し自ら其責を負はなければならぬと申して居ります。

## お友達の事

で御座いますか。夫れも大體は只今申しまする通りで御座いますが、然し小學校時代には餘り早くから愛憎の念が生ずる樣なことは、決してよい事でありませんから、子供が學校から歸つて來て、何誰さんはいけない人だとか、何某さんは嫌いな人だとか、色々他人の評判などいたします時には、夫れを誡めて寧ろそんなに批評するのが惡いとし、成るたけ衆童と平等に、濃薄なく、交らせるやうに努めてをります。然るに小學校を終へて高等女學校時代になりますと、これは大に趣きを異に致します。何となれば小學校は天眞爛熳な、聖書に所謂、天國にあるものは斯の如きものなりと云つた樣な誠に罪もない、兒童等の無邪氣に遊び戯るゝ、地上の樂園でありますけれど、高等女學校や中學校となりますと、第一方々の小學校から敎師を異にし、校風を異にし、友人を異にし、境遇を異にいたしまする少年少女の寄合であつて、隨て各自の個性と云ふものが、ボツ〳〵其芽を萌して來た時でありますから、お友達の撰擇と云ふことも、親たるものゝ大に注意を要する所があるのであります。例令ば何誰さんは傲慢でいけない人ですと云へば、小學校時代には聞流しにしてをつた事も、こゝでは注意して其人の爲人を聞き、夫れは他分お家がよくつて、又先の學校で、學問が人並以上に出來るので、學校でも、家庭でも皆にチヤホヤされた方でしよう。高等女學校は多くの學校からよく出來る人達ばかり、より集つてをるのですから、小學校でよく出來たからとて、決して威張れるものでないと戒めて、そんな人と深く交際するのは、餘りよろしくないでしようと注意し。華美な娘は虛榮心のつよい人となる事や、其他種々樣々の事を、彼等が學校から歸つて來て、語るところに注意してをつて、夫れ〳〵適當な敎訓を與ふるのです。尤も

この友人の撰擇と云ふことも、決して彼等の意志を蹂躙する様なことはいたしません。何處までも子女の心に善悪の差別を判別させて、去就を決せしむるのであります。

友人同士の交際で御座いますか。通例良家の子女が身を誤りまするのは、この友達同士の自由な交際が其の原因をなすことが多いもので、之は子女を持つ母親の殊に留意すべき事と存じます。彼の越後の海岸で共に海に投じて死んだ、二人の令嬢の如きも、其の一例でありませう。夫れで私は友人同士の交際は親と親とが知り合つて居る人とか、特別な關係ある間柄の外は固く禁じてをるのであります。

# 讀み物の事

ですか。讀み物は小學校の初めの時代には讀書力を養ふために、お伽噺や少年少女に適當な讀み物を許してをりますが、いよ／＼讀書力もつき、何でも少年雜誌などが自由に讀める頃になりますと、段々之を禁じ、愈々高等女學校や中學時代になりますと、堅く之を禁じて、教科書の外は一切之を手にせぬやうにいたして居ります。これは一は雜誌類などに讀み耽りますと、どう致しても學課がつぎになりますからです。或家の坊ちゃんが非常に雜誌や讀み物がお好きで、親も別に惡いことでもないので氣にとめませんでしたが、段々成長しますと益す／＼之に耽りまして、遂には家は學校に行く體にして、辨當を持て出ながら、學校には行かずに毎日圖書館に行つて、少年雜誌を片つぱしから讀んで樂しんをつたと申すことであります。こう云ふ子供は必ず學校の成績が劣等です。女兒にはこんな極端な兒は勿論ありませんが、雜誌を讀み耽るものは、必ず小說を好みますもので、空想的な感情的な人間となるのでありますから、何方から云ふも現今の婦人雜誌などは、害ありて、利益なきものと存じまして、特に高等女學校時代の子女には雜誌は元より小說などは嚴禁してゐます。唯だ少しく困りますことは、教科書ばかり讀ませて、他の讀み物を禁じますと、どうも文藻がなくなる傾きがあることです。婦人にせよ男子にせよ、之からの世の中は、人樣の前に立ちて、自分の意見を發表することが大事であると同時に、文章を以て意見を發表することも必要であります。夫れに文章がかけぬ樣ではいけません。ここに女は人の前で話すと云ふよりも、文筆の必要がありますのに、教科書以外のものを禁ずれば、どうも文章の彩がない樣であります。そこで私はこの爲めには夏冬の休みなどに、特に八犬傳であるとか、三國志であるとか、其の他文色もあり興味もあるもので、然も讀んで害にならものぬを擇んで、それをよむことを許す

のであります。子供も習慣となれば、別に雜誌を欲しからずに、熱心に學校の事を勉强いたします。

但し最早や高等女學校も卒業しますれば、充分思想も堅固になり、又一方には社會と云ふものが、どんなものかと云ふことを知る必要がありますから、小說や雜誌などをも讀ませる必要があると存じまして、現代作家の小說でも評判のよいものは讀むことを許してをります。

之を要するに思想の固らない子女には教科書に其勢力を傾注させて、他に心を散さない樣にするのが、いづれの方面から見ましても利益であると存じまして、私共では專ら其方針をとつて居ります。

## 運動の事

ですか、運動に就ても矢張り非干涉主義で御座います。姉の方は目下お茶の水に居りますが、〇〇と云へば評判の運動すきで、テニスで御座れ、徒步競爭でござれ、何でもかでも眞先に出て、運動と云へば何時でも第一等で御座いました。私共は別に奬勵もせねば、又禁止もいたしません。男子なれば運動に凝りて學業が次ぎになると云ふこともありますが、女子は何程運動家でも科業をやめてする人は少い樣であります。内の娘なぞもそんな運動狂でも、學科も常に優等で御座いました。で私は、これは決して禁ずべきものでなく、寧ろ奬めねばならぬものと思ひます。なぜなれば、此等の運動は放課時間にやるので、運動をせぬ人は、アチラに寄つたり、コチラに寄つたりして、庭の隅や木かげに集つて、人の噂や着物の品評などに下らぬ時間を費し、それが自然から品性の上にも影響いたしますが、一方運動に耽つて居る人は熱心に活潑に其方に精神を集注致しますから、肉體の健康をますと共に、精神上にも非常によい結果を來し、所謂健全なる精神と健全なる肉體とを有するやうになるのであります。

更に今一つは將來のために必要かと存じます。女は將來人の母とならねばならぬ、之れは先づ定つた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

運命である、そこで將來子女の母となる場合にテニスと云ふものはどんなものか、ベースボールと云ふものはどんなものか位は心得ておかねば、眞に彼等に同情同感を以て彼等を敎育することは出來ませぬ。ラケットの持ちやう位は心得てをく必要があると、私はつくづく感ずる事があります。此點より云ふも之からの婦人は運動の必要があると思ひます。

之を要するに私の子女敎育の方針は何處までも子供の人格を尊重して、子女の善良なる師友たるを期し、命令するにあらずして、夫れよりもこうしてはどうですかと、何時でも撰擇の餘地を存し、彼等の自由意志に訴へて善惡正邪を判別すると云ふ樣にいたしてをるのであります。成長發達の眞盛りにある中學或は高等女學校時代の少年少女ほど命令せられ、拘束せられるのを嫌ふものはありません。こゝが親の最も注意を要する所ろで、干渉して居つて、其の實干渉して居らぬが如く、放任して居ないで其實放任して居るが如く見せる。俗に所謂つかず離れずと云ふ手加減は、母親の尤も心を砕かねばならぬ大事なところと思ひます。（談話筆記　文責記者）

## 二つの家庭

「叔母さん、其洗ひ流しなさつて置て何になさるの？」

「これ？、これはお天氣の好い時に糊にして着物につけて、雨の日には糠味噌に入れますされ、麹の代りになつて、糠味噌の味がよくなりますの」。

「アラ私の家では洗ひ流しは皆棄てつちまふのですよ」。

「ではお洗濯の時の糊はお買ひなさるの？」。

「家では洗濯はみんな洗濯屋に出します」。

垣根ごしに伺つた事ですが、叔母さんと、預つたお子さんとの會話で、二つの家庭の模樣が之程違ふので御座います。此叔母さんと言はれろ方は、平素約やかにして居らしつて、誠に行届いた方です。お心掛よく暮らされた結果、地所も家作も購はれて、手元緩かな御家庭でございます。

# 隨感

## 新年の感

クリスマスよ何よと申して居る間に年は暮れ、四十五年の春を迎へました。新春の感は毎年も同じ事で、今年こそは――と云ふ一種の奮發心であります。一日の計畫は朝にあり、一年の計畫は元旦にありとは、古い言葉でありますが、同時に新しい言葉であります。私共が日々の仕事の上に經驗する所より見ましても、朝の準備計畫が拙かつた日には、少くとも其日の半ばは失敗であります。準備は成功の半以上と申しますが、確かに眞理であります。此點から云へば、我等は年の改まるや、先づ深思熟慮、此年の作戰計畫をせねばなりません。

しかし、人間ほど弱いものはない。如何に準備をしても、執行順序を立てゝも、一月たち二月たち三月たてば、初めの決心は失せて、誓つた心が重荷となり惰くなつて遂に中止するに至るのであります。それで私共はこれに對して別樣の考へ方をもたねばなりません。一體新年であるがゆゑに計劃をたてるのが間違つてをる。年月など云ふものは人間が便宜上つくつたもので、正月など云ふことも、一歩進んで考ふれば、無意味なものと見る事も出來る。我等は常に計らねばならぬ。常に夫れを行はねばならぬ。「天の父は今に至るまで働きたもふ。我等も働くなり」であります。

で我等は此斷へざる活動力を何處から得るべきか。云ふまでもなく、神より頒ち賜ふ外はありません。神は「倦みたもふ事なく、疲れたもふ事なく、疲れたるものには勢を與へ、弱きものには力を與へ給ふ」お方であります。新年に當りて私共の標語は『エホバをまち望め、俟のぞむ者は新なる力を得ん、されば走れども疲れず、歩めども倦まざるべし』であります。（きよ）

# 一言一行

聖書にも「いと小さきものゝ一人に爲せるは我になせるなり」とか、爾ろに一杯の水を與ふるものは即ち我になせしなりとか云つて、我等の些なる一言一行をも、決して苟もするものでない事を誡めてあります。由來人間と云ふものは、大きい事は何事であれ、之を注意して見たり、考へたり、言つたりしたりするけれども、小さい事は忽諸にするものであります。例へば大地震があつて、慘狀を極めたとか、大火があつて目もあてられぬとか云へば、我れも〳〵と同情を表し義捐金などをするが、あはれな寄邊なき人のためには一杯の水をも與へず、見て見ぬふりをするのであります。

又日常の行爲に於ても同樣で、大きい善言、大きい善行は何人も心掛けるが、少さい善言、美行即ち、すべて私共が知らず〳〵の間に當然せねばならぬ事柄は、案外不謹愼の間に行はれて居ることを發見するのであります。此間も或人から聞いた事でありますが、田舍に傳道してをつた或牧師が轉任することなりました。其二三日前一人の信徒が訪問いたしますと、其牧師は一生懸命に裏の畑の野菜の手入れをして居られた。彼は「先生、もうお出立になるのではありませんか、そんな事、およしなさいませ」と云つた。牧師は鍬をやすめて「コウしてをけば後に來る人が喜ぶであらう」と云はれた。これは十餘年前の話しであるが、其信徒は今に至るまで、此牧師の一言一行を深く心に銘じて、何事にも之れをあてはめて、感謝の生活を送つて居るとの事である。

私は先生を思ふ時に其雄辯なる說敎ではない尻を端折つて鍬を杖つきながら「コウしてをけば後に來る人が喜ぶであらう」と云つた言葉だとは、其人の物語でありました。千里の道も一步より初まるとは古くして新しい眞理であります。一言一行は小にして、然も決して小ではありません。(きよ)





Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 小兒を尊敬せよ

ジョージワシントンが或時雜貨店に入つて居ると一人の婦人が可愛い小兒を連れて入つて來た。ワシントンは之を見て、オヽ可愛兒よ、お前大きくなつたら偉くなれよと其頭を撫でた。母は大に夫れを喜んで此兒にワシントンと云ふ名をつけた。之れが彼の有名な文豪アーピングワシントンであつた。此恩返に彼はワシントン傳をかいたと傳へられてをる。

ワシントンと云ふ人は實に子供を尊敬する人であつた。彼は常に「自分はあの無邪氣な兒供が、將來大臣大將になるかと思へば、尊敬せずには居られぬ」と云つたそうであるが、さきの話と思ひ合されて彼の人格がゆかしくてならぬ。小兒を愛する人はある尊敬する人は少くない。ことに日本になどには少くない。クリスマスと云ひお正月と云ひ、これは寧ろ小兒の時である。この時に當り子供と云ふことに就て考へるのは空しきことではないっ(きよ)

## 新刊紹介

●英國より祖國へ　内ケ崎作三郎著

最近二三年の間、私が最も興味を以て讀みしものは、内ヶ崎氏の英國より遙々故國の雜誌新聞に寄せて、其感想を述べ、見聞を語りたる文章であつた事を告白する。此書は即ち本誌、新人、基督教世界及び太陽等にて公けにしたる其文を輯めて一冊としたるものであつて、氏の滯西紀念とも云ふべき興味ある感想記である。載するところ三十四篇、人物傳あり、紀行あり、隨筆あり、感想あり、宗教、政治、教育、社會、婦人の諸問題の評論あり。其趣味の多方面なる、行く所として可ならざるはなく、其間著者の雄渾にして健實なる信仰と思想とは、闊達なる文章と相俟つて、人をして頁より頁へと進ましむる。實に本年に於ける掉尾の好著たるを失はない。殊に私が之れを敬愛する姉妹に勸めたきは、本書が只だに彼國の風俗人情を紹介し社會事情を知しむるのみならず、熱心に、適切に女子教育問題や婦人の諸問題に就て論ずるもの多いからである。製本は美麗にして寫眞版數葉あり、書名と誠によさわしい裝ひである。

(クロース美本　定價一圓郵稅八錢　東京北文館發行)

●實用家計簿　(本年度用)　坂部俊子案

家計簿は近來の流行である、流行するため羽仁さんと嘉悅さんの様な問題も起るのである。此書は果してどう云ふ所を基として立案したものか。特色としては「毎日の收支を容易に且つ精確に書けること收出高が一目瞭然たること」をあげてあるが、私どもには今が今是非の判斷を下すことは出來ません。只四六二倍版は餘の大に過ぐるなきかを思ひます。(定價四十錢　東京北文館發行)



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

## 子供欄

# ゆり子とポチ

十二月二十四日の夜、八時になるとゆり子は例の通り御父樣と御母樣に「おやすみなさい」と兩手をついておぢぎをすると赤いお寢衣に着替へて、小さい枕に打伏て、丸くなつて御祈りを初めました。

「天の御父樣！」と申しましたけれども、明日は夏休頃から待つて〳〵居たクリスマスかと思ふと、何んだか無暗にうれしくなつて、なんと御祈りしていゝのか後が出なくなつてしまひました。やがてたつて「明朝誰よりも一番先にゆり子がメリークリスマスーといふ事が出來ますやうに」と熱心に御願して、スヤ〳〵と鼾をよせたまゝねむつてしまひました。

何時間位眠たのですか、ゆり子はパッチリと大きな目を開けました。未だ夜中だと見ねまして家中シーンとしてゐて何の音もしません。窓のカーテンの間からキ

ラ〳〵と美しい星がどつさり覗いて居ます。ゆり子は日曜學校で見た白いお鬚の長い杖を持つたお爺さんにエス様のお生れなすつた所を敎へたお星様がきつとあの中に居るのだらうと眺めてゐます中、フトゆり子は昨日あんまりクリスマスの歌の御稽古や暗誦などに夢中になつて居たので、ゆり子の大切な〳〵ポチに今日クリスマスだと云つて聞かせて置くのを忘れたのを思ひ出しました。

「アラ！どうしよう！きつとポチは知らないで居るわ。さうして、もしも今夜サンタクロースの御爺様がいらつしつた時ポチが盜棒と思つて吠へたら大變だわ大人だつてきつと驚愕して煙筒から落ちたら痛くつて泣いてしまふわ。そしてお人形様やいろ〳〵な送物を破してしまつたら、……それこそ大變だわ、どうしようかしら?!、てもいつかポチに日曜學校から頂いて來たサンタクロースのお爺さんの畫を見せて御話して上げたから覺ねてゐるかしらん………アー心配だここ………てもまだ、きつといらつしやらないようだから今の中私ポチの所に行つて云つて聞かせて上げよう………されがいゝわ………」。

ゆり子は急に思ひついて寒いのもかまはず暖いお床から拔け出して御玄關に出て

御父様の外套を頭からすつかり被つてコツソリ御庭へ出ました。庭石の上にあつた御母様の大きな下駄を引かけて長い外套をヅル〳〵引づりながら裏門のポチの小さい箱の御家の方へサツサとまゐりました

丁度此時、けたゝましく吠ゑながら非常な勢で大きな洋犬が走つて來て今にも飛び付さうにしました、ゆり子は不意打に

驚いてペタリと尻餅をついて犬にも劣らぬ程の大聲で泣き出しますと急に犬はゆり子がわかつたのか尾を振つてクン〳〵云ひながら外套の中から出て居る涙だらけのゆり子の顔をなめるやら自分の身をこすりつけるやら大騷を初めました。ゆり子はやつと安心しましたのか泣漱をしながら冷く凍ゑた小さい兩手を



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

出して、ポチを坐つたなり抱いて

「ポチつたら………ポチつたら………突然あんな大きな聲を出して………契驚したわ………いやなポチ！どうしてあんなに怒つたの？、泥棒と間違た？ねさうでせう？………だから私心配したのだわ………アーもうそんなに甜ちやいや！もう堪忍して上げるから柔順しくじつこして居るのよ、ね。ようく云つて聞かせる事があるんだから………よッポチッてば！………あのね、私ね、さつき目がさめて急に思ひ出した事があるの、それて大急でポチに遇に來たのよ何の御用だかわかつて？………エ？、わからないてせう？。あのね、今夜ね、おうちのストーブの煙筒からね御客様がいらつしやるのよ。でもね、ポチの知らない方よ、私もまたお目にかゝつた事はないの、毎年夜中ばつかりいらつしやるから………でもね畫てよく知つて居るの、おぢい樣よ、おぢい樣つてもね、宅のおぢい樣とはちがつてね、西洋のおぢい樣よ、白いお鬚がどつさり生へて居てね、いろんなものを負つていらつしやるのよ。それてね、重くてころぶと大變だから杖をついていらつしやるの、だから泥棒ご間違て吠へてはいけませんよ。大人



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

だけどもおぢい様だから私の様に喫驚してころんでしもふかもしれまいもの、ね、ホラいつか私カードを見せて上げたでせう、可愛い、顔のおぢい様を。サンタクロース様といふのむづかしい名でせう?私でさへ、日曜學校の先生に教へて戴てやつと覺えたのですもの、ポチには無理ね名なんかいいわ、覺えなくとも…

……きつと〳〵吠へてはいけませんよ。わかつて?…………エ!?…………アラ

—ポチ！た目をつぶつて………眠つしまつたの？、いゝ氣持？、もつさこうやつて抱して居て上げたいけごも、もう其御客様がいらつしやるかもしれないから、私もう歸つてよ………ポチ明日の朝早くメリークリスマス！つて云つて來てよ………アー重い、ポチの重くなつこさ！」

ゆり子は膝からポチを下して立上り又ズル〳〵さ外套を引づりながら行きかけるさ、ポチが外套の袖をくはへてクン〳〵いふ、ゆり子はさも困つたらしく首を傾げて

「ポチ、何故なくの？淋しいの？、困るわねー」

ゆり子はポチごもつれ合ながら玄關て幾度も〳〵

「ポチ、さよなら〳〵」

さ面をポチの頭に押しつけ〳〵とう〳〵戸の中に入つてしまひました、ポチは戸の外て中をのぞいて見たり小さい足音に耳を傾むけて見たりしてしばらく、そこにかしこまつてゐたが、ノソ〳〵と又門の方へ歸つてゆきました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

次の朝早く赤い着物に白いエープロンを蝶の樣にかけたゆり子は、兩手に送物て一つぱいになつてゐる靴下を振り廻しながらポチの箱へ走つて來ました、それを見てポチは尾がちぎれる程振り廻して肩あたりまで飛付ひてよろこぶのを、ゆり子は兩腕でギユーと抱へて、

メリークリスマス！昨夜御客樣がいらつしてよ、よく云ふ事を聞いて吠へなかつてねー。ホーラ、ね、ごつさり、きれいでせう、サア、此お菓子、ポチに送物よ、ポチも、もう、クリスマスもサンタクロース樣も覺ゐてねー、來年は歌だの暗誦だの敎へて上げるわ、メリークリスマス！、ポチ！」。

ゆり子とポチ（おはり）



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 林町たより

せいさん

◎あけましてお目出度御座います。皆々樣もすが〳〵しく御迎年のことと篤くお祝ひ申します。皆樣の御慈愛の下に新女界も四つになりまして益々發展いたしますことを深く感謝いたします。今年は益々努めいそしみまして皆樣の同情に酬いたいと祈つて居ります。

◎この號はクリスマス並に新年號と云ふつもりで、四つになつたお祝をかねてページを增し小供の讀み物をそへるなど、これでも一生懸命につとめたつもりです。表紙も何か珍しい意匠をと考へんでもありませんでしたが、有田先生が南洋に行かれた今日、生まじつかな事をしてはと存じまして、表裝はお兄い樣にまねて「アウトルック」と云ふアメリカの兄樣の意匠をちよつと拜借いたしました。題畫は有名なヴンダイクの聖母子であります。色彩の配合などについては電車の中の廣告にまで氣をつけていろ〳〵苦心しましたが素人の私共ゆゑ皆樣のお氣に召すとは出來ますまい。お批評を願ひます。

◎今號から二三號に亘り、「身にしみた母の躾け」と云ふ記事を出したいと思ひます。皆樣もこれにつき、身に泌みる御經驗がありますなら遠慮なくお認め下さいまし。夫れから特に申上げたい事は本年よりは「讀者の聲」とも云ふべき欄を設けまして皆樣の御感想なり御氣焰なり御實驗なり社會の出來事に對する御所感なり、本誌に對する御批評なりを歡迎いたします。どうか御遠慮なく御投稿下さいまし。

◎終りに神の恩寵皆樣の上に裕かにして、感謝を以て此年を送られんことを祈ります。


**定價**

| （郵稅加算） | 内地及朝鮮支那 | 外國 |
|---|---|---|
| 一部 | 金拾錢 | 金拾四錢 |
| 六部（半年分） | 前金六拾錢 | 前金八拾錢 |
| 十二部（一年分） | 前金壹圓拾錢 | 前金壹圓六拾錢 |

**廣告料**

| 一行（廿三字詰） | 金廿五錢 | 一頁 | 金拾圓 |
|---|---|---|---|
| 四半頁 | 金三圓 | 内表紙 | 金拾貳圓 |
| 半頁 | 金五圓 | 外表紙 | 金拾八圓 |

尚は引續き御廣告の向へは特別大割引可仕候

**摘要**

▲本誌代金は總て前金にて御拂込み被下度候

▲郵券代用は一割增の計算にて御送附被下度候

▲御送金は爲替にて申込まるゝ方便利に候但手數料金壹錢御加へ被下度候

▲通信、寄與、寄贈雜誌等は必ず發行所に願上候

明治四十四年十二月廿五日印刷
明治四十五年一月一日發行

發行兼編輯人　東京市小石川區林町四十三番地　海老名彈正
印刷人　東京市小石川區丸山町四番地　相原一郎介
印刷所　東京市赤坂區田町五丁目十一番地　齋藤活版所
發行所　東京市小石川區林町四十三番地　新人社
電話番地二五四四
振替貯金口座一四〇〇五

# 新人第拾參卷第一號目次 （一月一日發行）（金拾五錢）


◎題言　キリストとヨハネ　ルーベンス筆

◎社　說

◎東亞大陸の新生を祝す

◎教　壇

◎東洋に於ける基督教の使命　海老名彈正

◎想　苑

◎ベルグソン哲學に就ける所感　日野眞澄

◎予が基督教を他宗教に卓越せりとする點　寺澤精一

◎現代日本に對する基督教の使命　内ケ崎作三郎

◎基督教の特色と其の使命

◎基督教の他宗教に卓越せる點と其使命　額賀鹿之助

◎雜　俎

◎イエスの母　ギユリツク　赤星生譯

◎我がノラを返せ　日本のヘルマー

◎淸國革命戰餘錄　黑旋風

◎教界思潮

◎基督教の最も主張すべき二大問題

△人格の價値と尊嚴　加藤直士

△倫理的積極的宗教　大島正健

△躰問題に御座候　今岡信一良

◎雁山集

△人格の信仰と活動　赤司繁太郎

△倫理的色調と人格觀念　星田慶治

△神人親子の信仰　本多庸一

△現實上の社會救濟　前田慧雲

△人格主義の鼓吹　中村長之助

△倫理的現實的宗教　能勢萬

△合理進歩的宗教　和田林熊

△基督の人格的地位の不動　安部清藏

△改革的精神と人格の尊重　谷本富

△全くの素人に候　村上專精

◎聖書講義

◎馬可傳　海老名彈正

◎評　論

◎四十四年の思想界概觀

◎四十四年の文壇概觀

◎時　評

◎教派同盟會の成立

◎東京ユニテリアン教會の改稱

◎寧ろ迫害を撰ばん

◎辯解の勇氣ありや

◎グリーン博士の「日本に於ける基督教運動」を讀む

▲新刊紹介　▲編輯たより

不喚樓主人



發行所　東京市小石川區林町四十三番地　貯金口座東京一四〇〇五　新人社

# 第三卷 新女界 合本

## 一月中旬製本出來　定價金九十五錢(送料共)

◉社說　(安井哲子)

▲死ぬ迄働き續ける元氣▲無意識の感化▲個人の歷史▲奮鬪と慰安▲他人の喜びに對する同情▲趣味のいろ〳〵▲過つて改むるに憚る事勿れ▲懷かしい十年前の夏▲溫情▲勇氣▲犧牲の精神▲心の準備

◉講壇　(海老名彈正)

▲現代婦人の缺陷▲永遠の生命▲恩惠の聲▲柔和の福音▲誤解せられたる基督▲女子の解放▲愛苦の眞義▲神の聖愛▲向上の動機▲基督の家庭▲基督教の眞髓

◉想苑

▲新らしき生活　谷津博士

▲現代女學生の惡傾向　小此木松子

▲禮義の根本觀念　三谷民子

▲亞米利加だより　海老名一雄

▲かあやん　德富健次郎

▲現代小說雜誌　小山東助

▲湯ヶ澤話　谷澤直秀

▲獨逸見聞記　吉野作造

▲婦人解放の是非　宮田脩

▲佐久間大尉の手紙　德富健次郎

▲婦風問題　島田三郎

▲女子の教育の標準　村田勤

▲婦人の活氣　小此木松子

▲伊香保より　野口精子

▲形式道德の無能力　村田勤

▲土耳古の話　小松武治

▲惠み多かりし二夏　三谷民子

▲夏の巴里　藤島武二

▲西班牙の夏　湯淺一郎

▲常樂の生活　二宮貞子

▲子女教育に對するの母の務　海老名みや子

▲婦人と信仰　海老名彈正

▲「アンドリヤ、デルサト」を讀みて　三谷民子

▲無題錄　小此木まつ子

▲女子の高等教育論　ジヨルダン博士

▲我國女子の將來　成瀨仁藏

▲婦人解放問題　内ヶ崎作三郎

▲男女問題の意義　安部清藏

▲淨心錄　谷澤直秀

▲世界最大の美　宮川經輝

▲文欄▲家庭▲雜俎▲衞生▲隨感▲其他稱々

入院診斷後應需

松田、林、峰間、三副長は目下當院に在勤

（本電）八八八（病院用）
八九八（私宅用）

# 東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋南

院長　醫學士　高田畊安

# 南湖院

相州高座郡茅ケ崎町海濱從停車場半里

電話ちがさき二番

河野、高橋、兩副長は目下當院に在勤

但　院長渡歐中　副長代理す

明治四十五年一月一日發行

明治四十二年三月廿九日第三種郵便物認可

東京市小石川區林町四拾三番地 新人社 貯金口座東京一四〇〇五

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN